

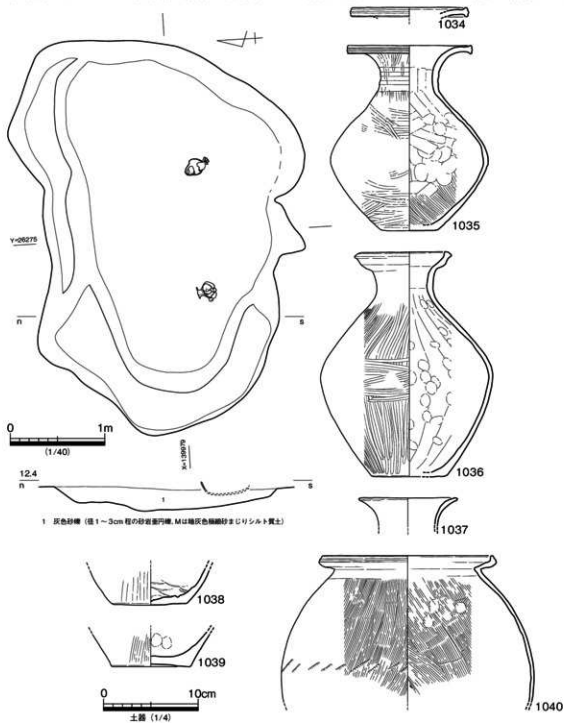
第 154 図 VII区弥生時代中～後期遺構 平面図

土坑

SK VII 01

VII区で検出した落ち込みである。長軸4.15、短軸2.6mほどの不整形な落ち込みで、深さ20cm、断面形は浅い皿状で、底面に凹凸が見られる。径1～3cmほどの砂岩垂円礫を主体とする灰色砂礫層で埋まっていた。遺物は図化したもの以外は微量である。

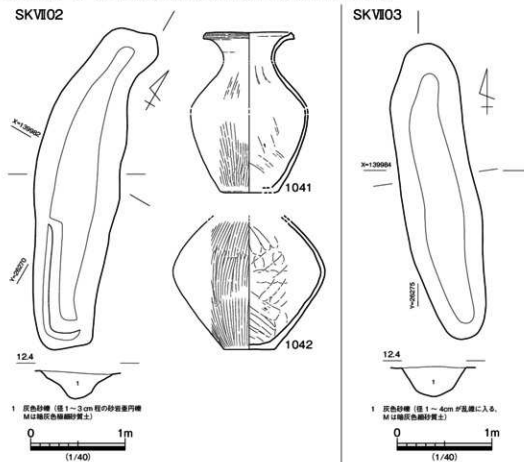
第155図1034～1040はSK VII 01から出土した遺物実測図である。1034～1039は壺である。1034は口縁端部に、1035は口縁端部と頸部に形骸化した凹線文を施している。1036は筒状の頸部から外上



第155図 SK VII 01 平・断面図、出土遺物実測図

方に開いたのち内方へ湾曲する口縁である。1037は混入か。1040は甕。胴部から「く」字形に屈曲する短い口縁を有する。端部は上方に摘み上げ、端面に2条の沈線を巡らす。胴部最大径付近にはハケ原体による圧痕文をやや雑に付している。

これらの遺物から、SK VII 01は弥生時代中期後半の遺構と判断される。



第156図 SK VII 02、VII 03 平・断面図、出土遺物実測図

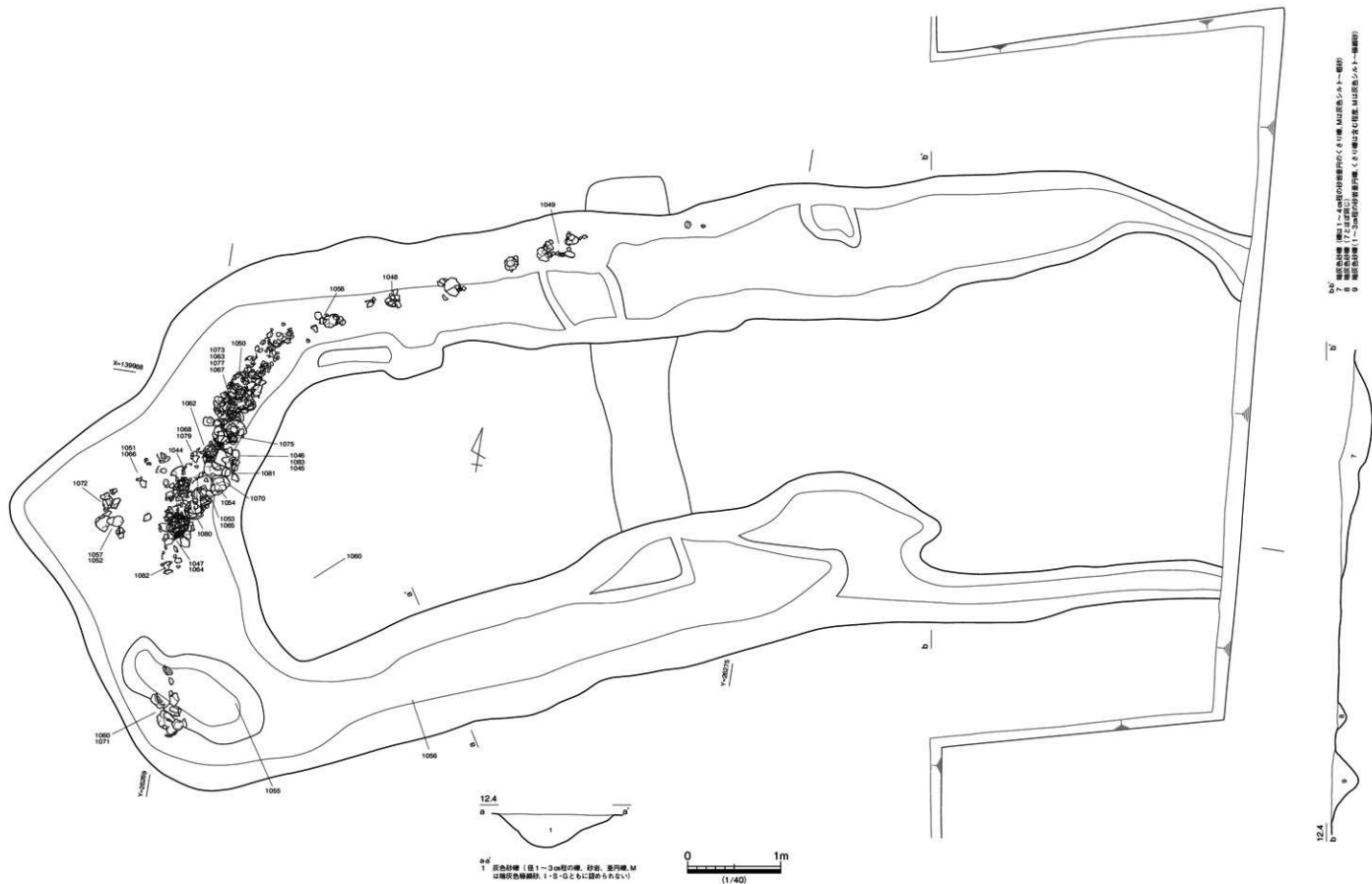
SK VII 02

Ⅴ区で検出した落ち込みである。座標北から19°西へ振った方向で長軸3.5、短軸0.9mほどの楕円形の平面形である。5mほど東に同規模で同方向を向くSK IV 03がある。断面形は椀状で深さ27cmを測る。埋土は灰色砂礫の単層である。

第156図1041、1042はSK VII 02出土の遺物実測図である。1041は接合できないが、同一個体である。口縁部は緩く外反し、端部を上下に肥厚させて平坦面をつくり2条の退化した凹線文を施す壺である。1042は算盤玉状の形状をなす壺胴部である。出土遺物から弥生時代中期後半の遺構と判断される。

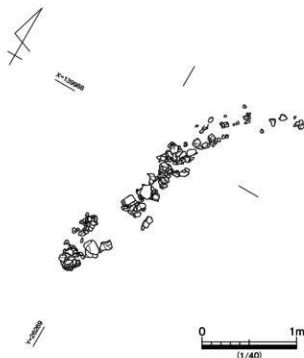
SK VII 03

Ⅴ区で検出した落ち込み（第156図）である。座標北から9°西へ振った方向で長軸3.1、短軸0.8mほどの楕円形の平面形で、断面形は椀形、深さ30cmを測る。埋土は灰色砂礫の単層である。出土したのは10点ほどの摩滅する土器細片のみで、遺物から時期特定はできないが、SK VII 02と同規模、同一



第 157 図 SD VII 01 平・断面図 (上層遺物出土状況図)

1 深さ約 1m (1~2m程の深さ、砂質、底平直、斜壁)
 2 深さ約 2m (1.5~2.5m程の深さ、砂質、底平直、斜壁)



第 158 図 SD VII 01 下層遺物出土状況図

4箱の遺物が出土している（第158図）。

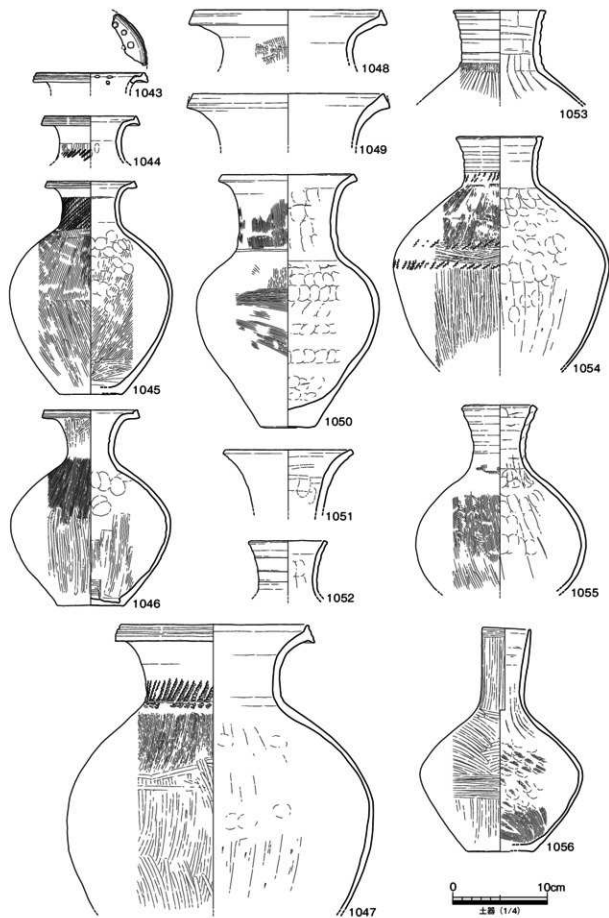
第159～161図1043～1084はSD VII 01出土の遺物実測図である。1043～1049の壺は、直立する頸部から明瞭な稜をもたずに短く外反する口縁で、端部を上下あるいは上方に擠み上げたり、わずかに肥厚させたりして端面に凹線文を施している。比較的張る胴部からしっかりとした平底の底部となる。1043は内面に円形浮文を付し、円孔も見られる。頸部にはハケ原体による圧痕文（1044）、ヘラ描き斜行文（1045）、貝殻腹縁による圧痕文（1047）を施している。胴部外面は、最大径の上半をハケ、下半をヘラミガキするもの（1045、1046）、最大径のやや上位までをヘラミガキ、その上部がハケのもの（1047）がある。また、頸部に1044はハケ原体による圧痕文、1045はヘラ描き斜行文、1047は貝殻腹縁による圧痕文を施す。1050の壺は大きい径で直立する頸部から緩く外反し斜め上方に終わる短い口縁を有する。端部は四角におさめる。頸、胴部の境界は調整の違いによって沈線状の境界線ができている。1051は筒状の頸部からラッパ状に開く口縁で、端部はそのままおさめている。時期が下の資料と考えられる。1052～1055は、筒状の頸部からわずかに外反する口縁の壺である。頸部に退化した凹線文が施される。1054は頸部と胴部の境界の上部、胴部最大径付近およびその上位に貝殻腹縁圧痕文が施されている。1056の長頸壺は肩の張ったイチジク状の胴部から直立する筒状の頸部が延び、口縁はそのまま尖り気味におさめている。外面は丁寧にヘラミガキされている。1059は弥生時代前期の壺の底部である。混入であろう。1060～1067は甕とした。胴部から外上方に短く屈曲する口縁で、端部を上下や上方に拡張し、端面に退化した凹線文を施している（無文のものもある）。1069、1070は胴部最大径付近に簡素化した板状工具による圧痕文を巡らせている。1072～1078は内面をヘラ削りにより器壁を薄く仕上げた底部片である。1079、1080の高杯は「C」字形に巻き込むような口縁で、太い脚部は「ハ」字形に開き、脚端は上方に拡張し、端面に凹線文を施している。1080は脚部に4点1組と単独の刺突文を施している。1082は杯部から「ハ」字形に開く脚部で端部は水平方向に湾曲させてそのままおさめている。脚部下半に3個1組の円孔を3方向にあげている。本資料は後出の資料と考えられる。1083は直立気

方向であることから弥生時代中期後半の遺構と考えられる。

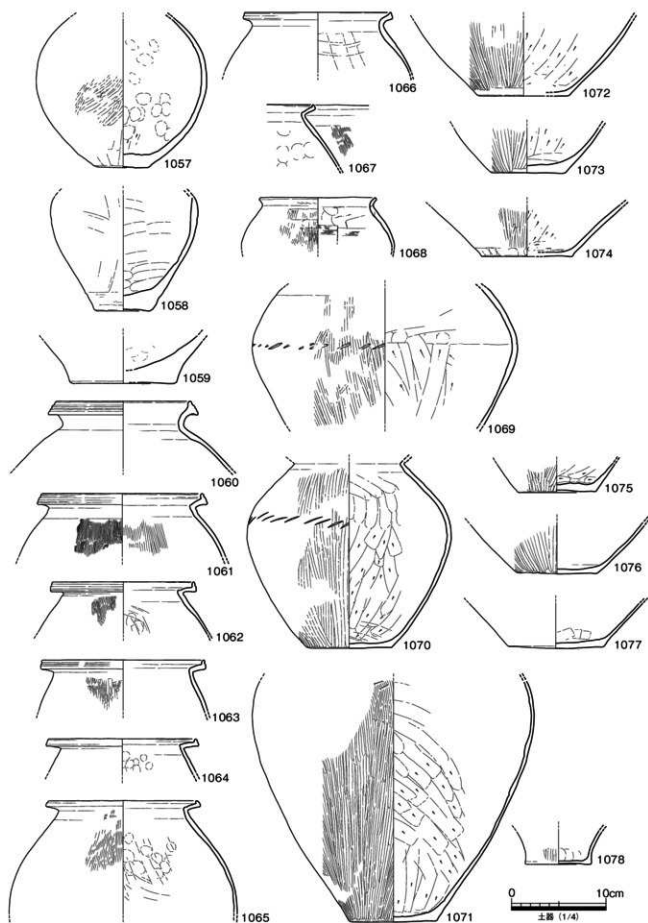
溝状遺構

SD VII 01

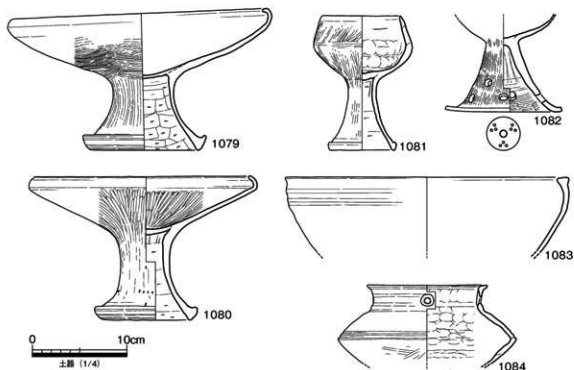
VII区で検出した溝状遺構（第157図）である。東側は調査区外になり、遺構の性格を特定するため東へ3mほど調査区を拡張したものの、さらに調査区外にのびている。平面形は「コ」字状を呈し、長辺は座標北から66°東に傾く方向である。溝幅は一定せず約1.4m幅を主体とし0.3～2.0mの範囲で、長辺は12m以上、短辺は4mほど、深さは35cmほどを測る。断面形も不整形で、長辺は南側が急で北側がなだらかな、短辺は東側が急で西側がなだらかな楕円形を呈する。西北隅を中心に短辺部分と北側長辺の西部で28%コンテナ



第159図 SD VI 01 出土遺物実測図(1)



第160図 SD VI 01 出土遺物実測図(2)



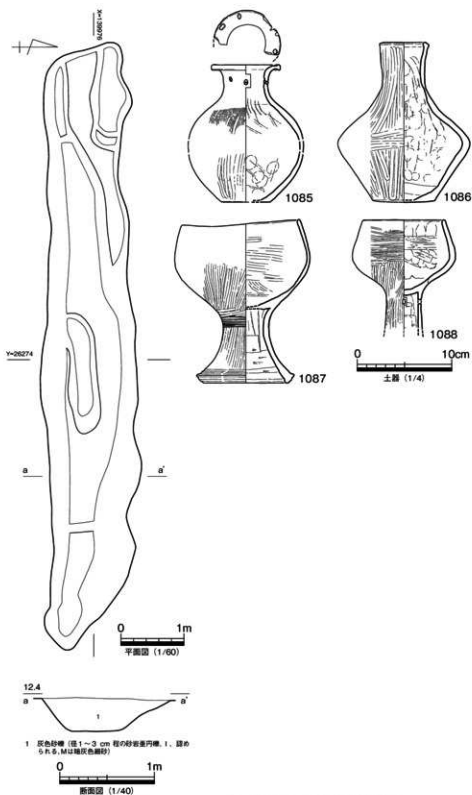
第161図 SD VII 01 出土遺物実測図(3)

味に立ち上がり端部を内外に拡張する形態の鉢、1084は頸部に円孔があり、外面に注口部が剥落した痕跡の見られる注口鉢である。

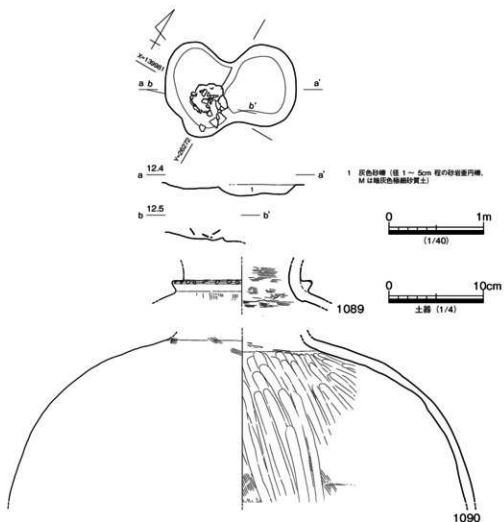
SD VII 01 出土資料は、完形に復元できる率が高く、調査時には一括性の高いものと判断していたが、整理段階で弥生時代後期の資料も存在することが判明した。遺物出土状況の写真や出土状況の実測図によると、後出のものは土器群の上部に存在しており、周囲において弥生時代後期の遺構が存在することから、後期の遺構を認識できずに混入させてしまったと考えざるをえない。なお、遺構の性格であるが、溝を埋めた砂礫と同質のものが溝の範囲を越えて周囲に堆積しており、溝の上部が後世に削平されたり、溝周辺の堆積層が溝内に落ち込んだりといった様相は想定できない。このことから墓といった機能を想定するには否定的で、性格不明の遺構である。

SD VII 02

Ⅴ区で検出した溝状遺構である。ほぼ東西方向の流向で、長辺480、短辺78cm、断面形は深い皿状で、深さ35cmを測る。埋土は灰色砂礫の単層である。出土遺物は図4遺物のほかに微量の土器細片のみである。第162図1085は、頸部より径の大きい平底の底部、球状を呈する胴部、筒状の頸部から外反する口縁をもつ。口縁端部はわずかに肥厚するのみ、口縁内面に円形浮文、頸部に蓋受けの孔を2つずつあけている。1086の壺は胴部中央付近に最大径があり、算盤玉状の胴部、明瞭な屈曲や境界をもたずに頸部に移行し、そのまま口縁に至る。胴部最大径付近の外面は横方向のヘラミガキ、以外は縦方向のヘラミガキである。1087、1088は下ぶくれした碗状の杯部をもつ高杯である。外面はヘラミガキされ、1087は脚部上半にヘラ描き沈線6条、脚端部とその上部に凹線を各2条巡らせている。



第162図 SD VI 02 平・断面図、出土遺物実測図



第 163 図 ST VII 01 平・断面図、出土遺物実測図

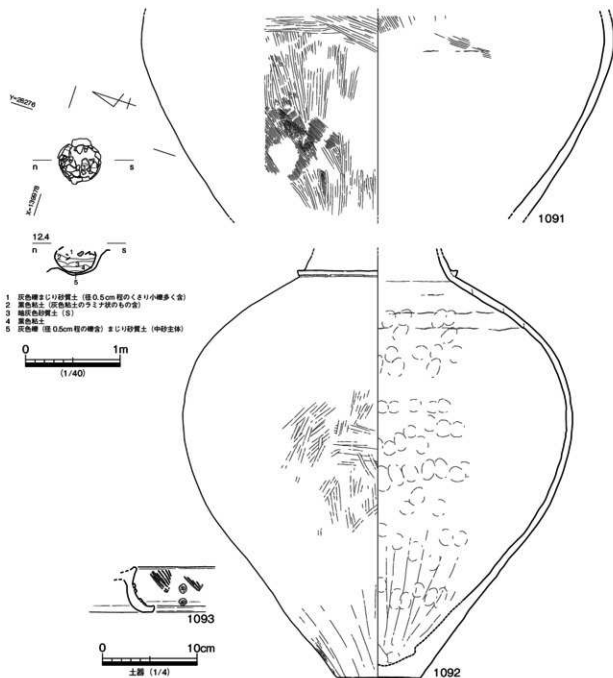
墓

ST VII 01

Ⅳ区北東部の砂礫層がひろがる部分から 5 基の土器棺と考えられる遺構が検出されている。ST VII 01 は、大型の壺が横倒しの状態で掘えられていた。掘り方は検出することができず、土器内部も含めて灰色砂礫層で埋まっている。第 163 図 1090 の壺に 1089 が落ち込んだ状態で出土した。頸部に「D」字形の刻み目をもつ文様帯を付しており、真鍋 V-4 期に降る資料である。両者は同一個体の可能性が高い。残存状況が悪く棺蓋は不明である。なお、棺身は西北方向に開いていた可能性が高い。

ST VII 02

弥生時代中期後半の遺構であるSK VII 01の上面で検出した土器棺墓である。東方に開口部を向けて横倒しにされた壺と、開口部に別の壺の頸部から胴部の破片を棺蓋として用いていた。棺内部は黒色粘土など細粒堆積物で埋まっていた。水洗選別を行ったが、特記すべき出土物はなかった。第164図1091は棺蓋として用いられた壺である。胴部最大径から頸部にかけて、全周の4分の1ほどの破片を利用している。1092は棺身として用いられた壺である。明瞭な平底で、肩部に最大径をもち、頸部と

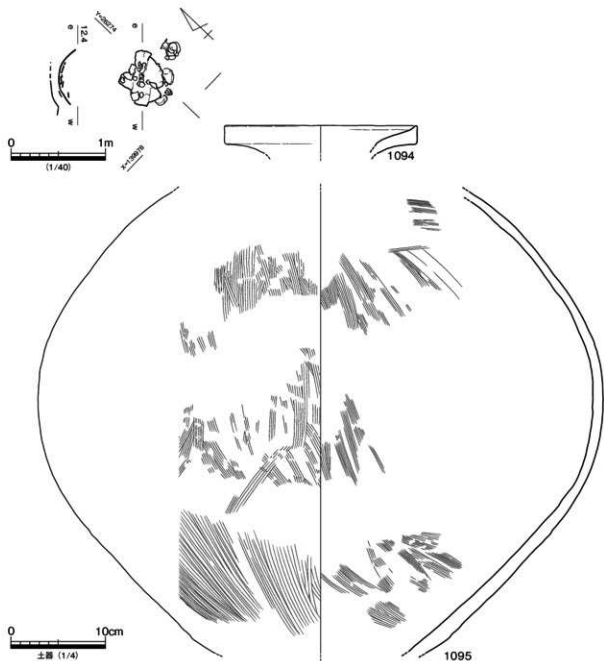


第164図 ST VII 02 平・断面図、出土遺物実測図

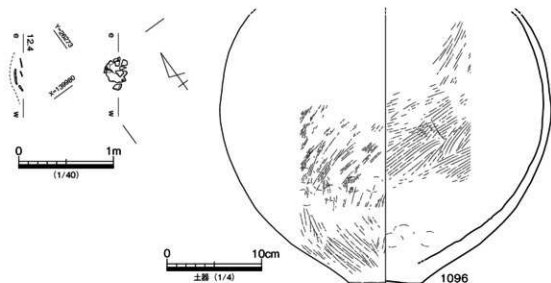
胴部の境界に突帯が巡る。棺としての器高は44cmを測る。1093は高杯の脚端部と考える。外面に竹管文のある円形浮文を縦に2つならべ、ヘラ描きによる鋸歯文を描いている。

ST VII 03

弥生時代中期後半の遺構であるSK VII 01の上面で検出した土器棺墓と考えられる遺構である。複数の拳大ほどの礫を配置し棺身を据えている。棺身は壺の胴部のみが遺存し、棺蓋は不明である。胴部の器壁の厚さから考えて開口方向は東と推定される。第165図1095は壺胴部の破片である。球形化が進んでいる。1094は器台の口縁部と考えられる。外湾する口縁で、端部を上方にわずかに擠み上げて垂



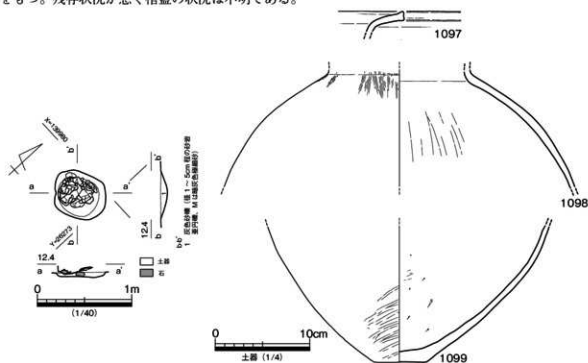
第165図 ST VII 03 平・断面図、出土遺物実測図



第166図 ST VII 04 平・断面図、出土遺物実測図
直方向の平坦面を作っている。出土位置は不明である。

ST VII 04

SK VII 01の肩付近で検出した土器棺墓と考えられる遺構である。大型の壺を横倒しの状態で検出した。開口方向は北と推定される。第166図1096は棺身と考えられる壺である。平底に球形化の進んだ胴部をもつ。残存状況が悪く棺蓋の状況は不明である。

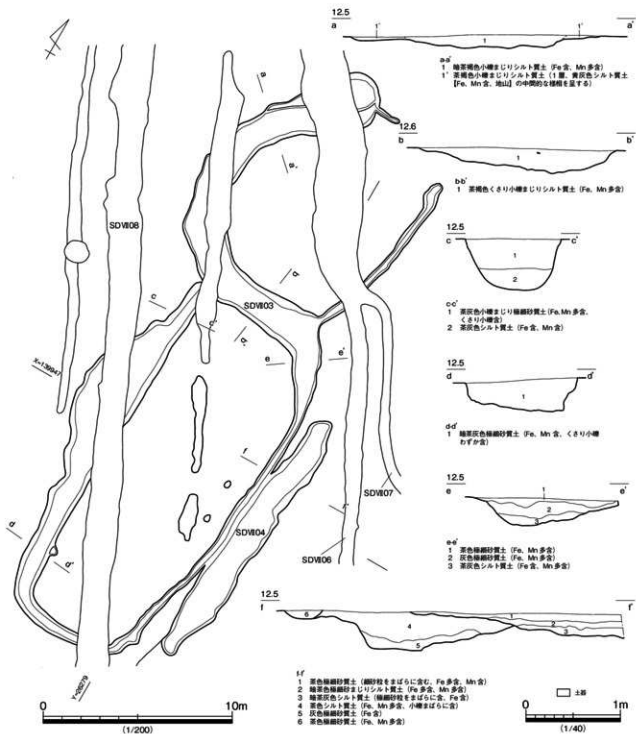


第167図 ST VII 05 平・断面図、出土遺物実測図

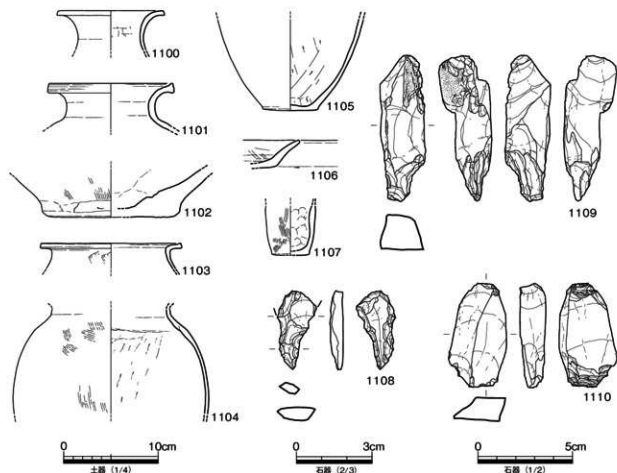
ST VII 05

Ⅴ区北東部で検出した土器棺墓と考えられる遺構である。複数の拳大の礫で棺身を据えていた。底部の位置から開口部は南と推定される。第167図1097～1099は同一個体と思われる、1097は広口壺の口縁の小破片、第1098、1099は平底で胴部の球形化が進んでいる。

以上記載した5基の土器棺墓と考える遺構は、5m離れた北西側のSTⅤ01と南東側のSTⅤ02の間に集中しており、一群のものと把握してよいと考える。時期は、壺頸部に突帯を巡らせること、明瞭な平底の底部をもち、球形化の進んだ胴部をもつものがあることなどから、真鍋Ⅴ-4期のものであろう。



第168図 SDⅤ03 平・断面図



第169図 SD VII 03 出土遺物実測図

SD VII 03

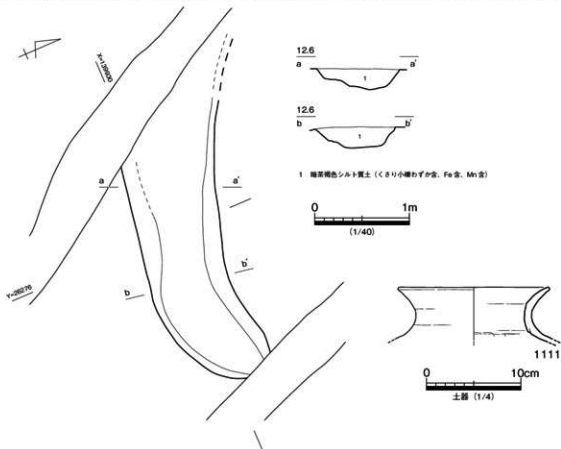
Ⅶ区で検出した区画溝と考えられる溝状遺構（第168図）である。SRⅥ・Ⅶ01の西岸に沿うように長方形の区画（溝の芯芯間で南北10、東西4mほどの規模）を囲繞する溝と直径5m（溝芯芯間）ほどの不整形に巡る溝が連結している。長方形に区画を囲繞する溝は、北・西・南辺はほぼ方位に合った方向に直線状に掘られている。西辺は中央やや北寄りで幅が広くなり、幅1.6m、深さ25cmの断面皿形の規模であるが、以外は幅60、深さ55cm、断面U字形を基本とする。東辺は幅25、深さ9cmほどで断面形は碗状を呈し、東側にわずかに張り出すような経路をとる。なお、東側はSDⅦ04（時期不明）より新しい。

北側の不整形に巡る溝は、南側は前述の長方形の溝と共有し、南から西側を経て北側で途切れている。溝幅は約100cm、深さ13cm、断面形は浅い碗状を呈する。南側から東側に延びる溝は、幅20、深さ8cmほどの規模を測り途中で途切れている。長方形の区画を囲繞する溝と切り合い関係は認められなかった。

遺物は、埋土の中位に破片が散在する状態で、ほぼすべて長方形の区画を囲繞する溝（共有部分を含む）から出土している。出土総量は28 $\frac{1}{2}$ リットルコンテナ1/4箱程度あるが、細片が多い。第169図1100～1110はSDⅦ03出土の遺物実測図である。1100は広口壺の口縁部片である。端部は拡張せずにそのま

まおさめている。1101は端部をわずかに上下に摘み上げた広口壺。1102は弥生時代前期の壺の底部破片、1103～1105は甕である。1104は内面を肩部付近までヘラ削りして薄く仕上げている。1106は外側に開く口縁部をもつ高杯、1107は平底の底部から垂直に立ち上がる胴部をもつ鉢である。1108は石錐、1109、1110は不明確であるが剥片化した楔形石器と考える。

方位を意識して掘削され、区画を圍繞する形態から、調査時は方形・円形周溝墓の可能性を考えた。しかし、遺物の出土状況に供獻といった様子は見られず、土層の観察でも封土が溝に堆積したような形



第170図 SD VII 05 平・断面図、出土遺物実測図

跡も認められない等、墓であることを示す根拠は得られず、遺構の性格を特定することはできなかった。

SD VII 05

Ⅶ区で検出した溝状遺構である。幅90、深さ20cmほどの規模で断面形は皿形である。検出長は3.5mほどであるが、もともと東西で途切れたエンドウ豆状の平面形であったと考えられる。SD VII 05は、SD VII 03から芯芯で2.6mほど離れた位置で、SD VII 03南辺と平行するような位置関係にあり、区画溝である可能性がある。出土遺物は微量、第170図1111の広口壺が出土している。胴部から明瞭な頸部をもたずに斜め上方に伸びる口縁で、端部はそのままおさめている。

旧河道

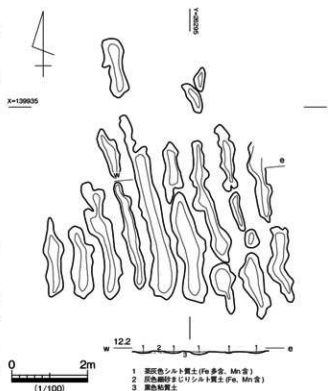
SR VI・VII 01

VI・VII区で検出した旧河道である。VI区では粘土取りの行われた地筆で検出され、トレンチ調査によって遺物の包含状況を確認し、旧河道を埋没させる堆積層の上部に遺物包含層があり、下部では遺物を包含していないことを確認した後、念のため一筆については河底まで全掘し追認した。この結果、VII区では遺物包含層までの調査にとどめ、VI区の一部の調査区では遺物包含層が希薄であったため包含層のトレンチ調査のみを行った。

SR VI・VII 01は、西岸のみを検出し、東岸は調査区外にのびる、西岸は急角度で落ち込み、検出面から河底までの深さは2.3 mを測る。埋積土は底から0.7～0.8 m厚の木質を含む暗灰色粘土、0.7 m厚の緑灰色の細砂粒の混じる粘質土等の細粒堆積物で遺物は包含しない。その上部に厚さ0.4～0.5 mほどの黒色粘質土層、0.4 mほどの小礫を含む茶色系のシルト質土層が堆積している。

SX VI 01

黒色粘質土層の上面は0.2 mほどの凹凸が顕著にみられ、耕作などの人為の影響と観察された。事実、本層の上面では畑の畝間の小溝と見られる遺構を部分的に検出した(第171図)。また、黒色粘質土層の下面では、幅0.6、深さ0.1 mほどの小溝を検出した。



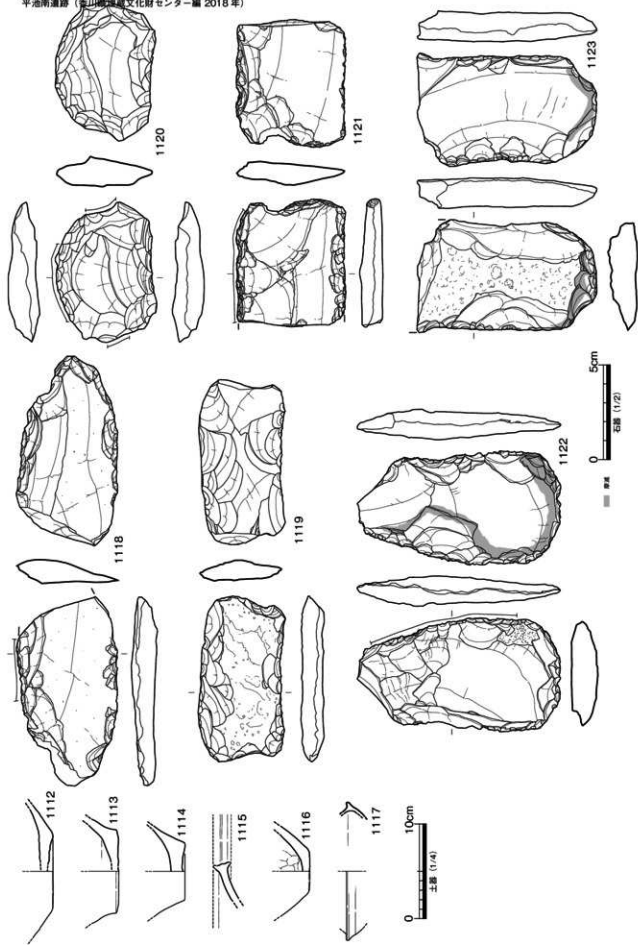
第171図 SX VI 01 平・断面図

第3層

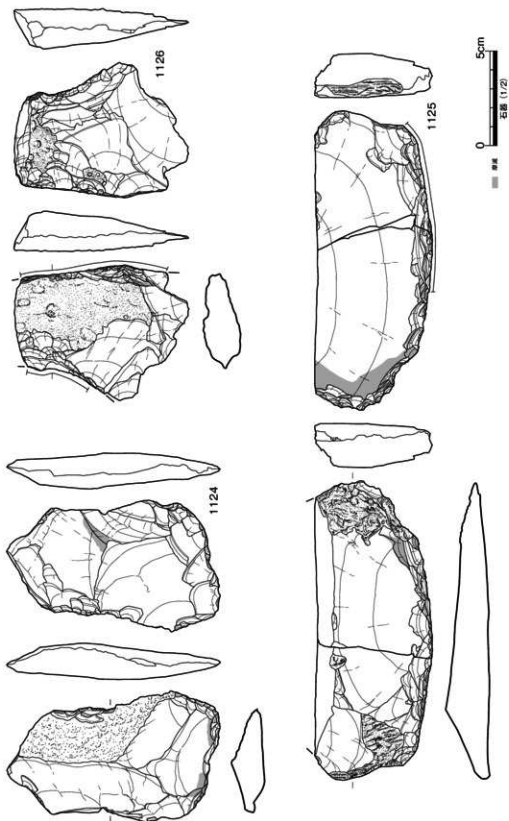
第172～177図は、SR VI・VII 01の第3層の黒色粘質土層出土の遺物実測図である。

1112～1114は弥生時代前期の壺、甕の底部である。1115は口縁端部を上下に拡張させ凹線文を施す壺、1117は須恵器杯身である。1117は上層からの混入と見られる。1118の削器は岩質により上手く剥離ができないためか波板状の刃部となっている。1119～1121

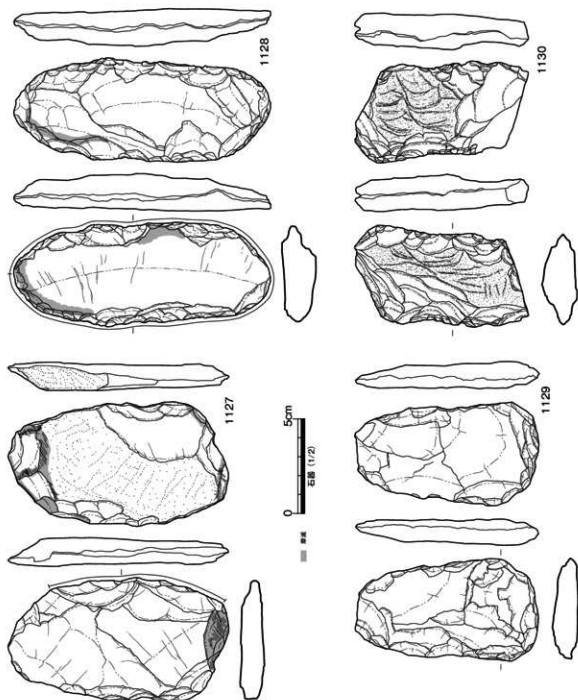
は打製石庖丁である。1120は両側縁に挟り状の刃潰しが見られることから打製石庖丁とした。ただし、全体に肉厚で刃部の一面も階段状の剥離が目立っている。1122～1126はサヌカイト製の打製石斧である。摩滅や擦痕の見られるものが多い。1127～1135は安山岩製(風化する)の打製石斧である。刃部を中心に摩滅の認められるものが多い。なお、平池南遺跡においては安山岩製(風化する)の打製石斧が散見されるが、サヌカイト以外の石材を選択する理由はよくわからない。1136は結晶片岩製で刃部に摩滅が見られることから打製石斧と考える。石棒残欠を転用している可能性がある。1137は結晶片



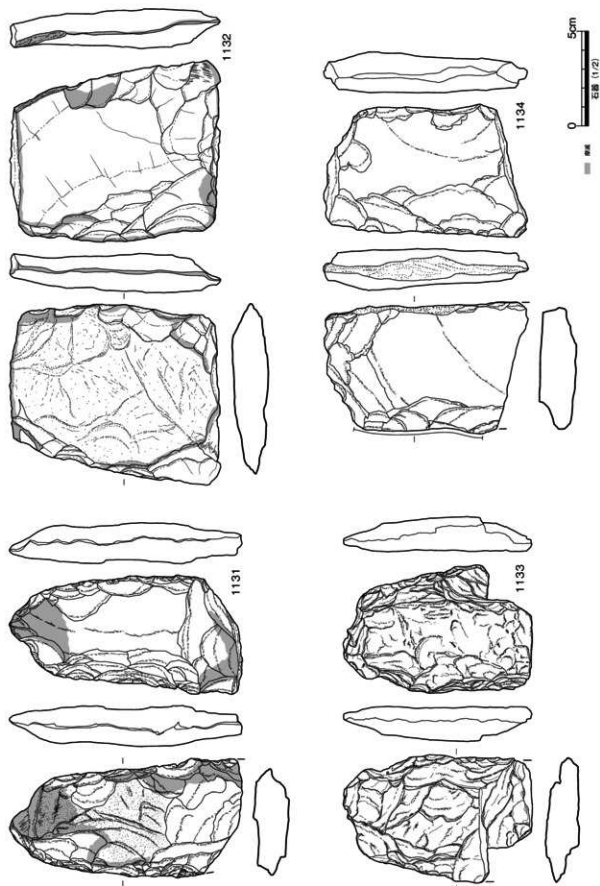
第172図 SR VI・VI01 上層包含層 (3層) 出土遺物実測図(1)



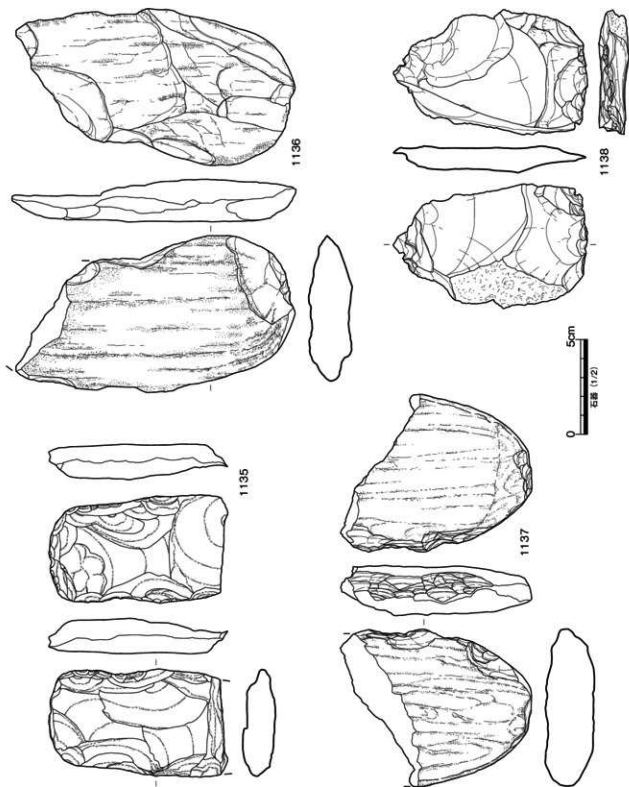
第173図 SR VI・VI 01 上層包含層（3層）出土遺物実測図(2)



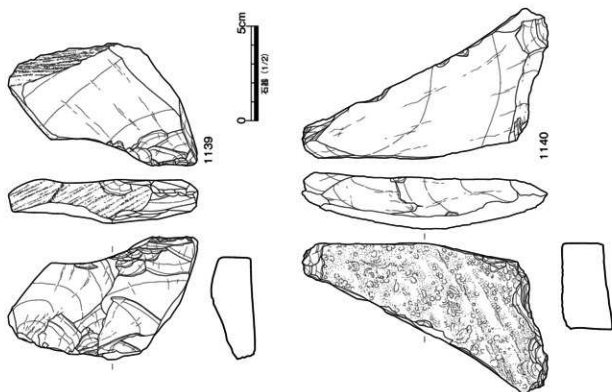
第174図 SR VI・VII 01 上層包含層（3層）出土遺物実測図(3)



第 175 図 SR VI・VI 01 上層包含層 (3 層) 出土遺物実測図 (4)



第176図 SR VI・VI 01 上層包含層(3層)出土遺物実測図(5)



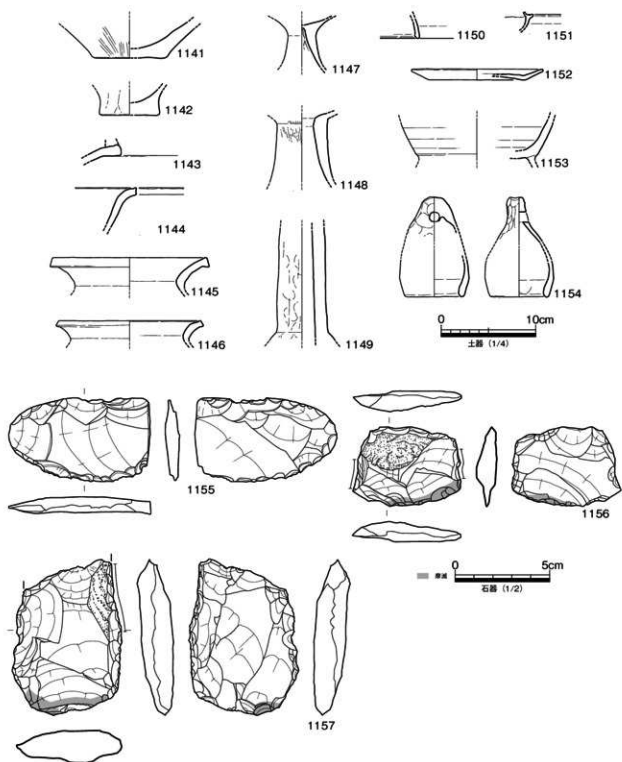
第 177 図 SR VI・VII 01 上層包含層（3層）出土遺物実測図（6）

岩製の磨製石斧である。一側縁は打ち欠いた状態で十分に磨かれていない。1138 は消極的ながら石核とした。

第 1 層

第 178 図は、SR VI・VII 01 の第 1 層（暗茶褐色粘質土）出土の遺物実測図である。弥生時代前期、後期の土器片、古墳時代後期から古代の土器片が出土している。

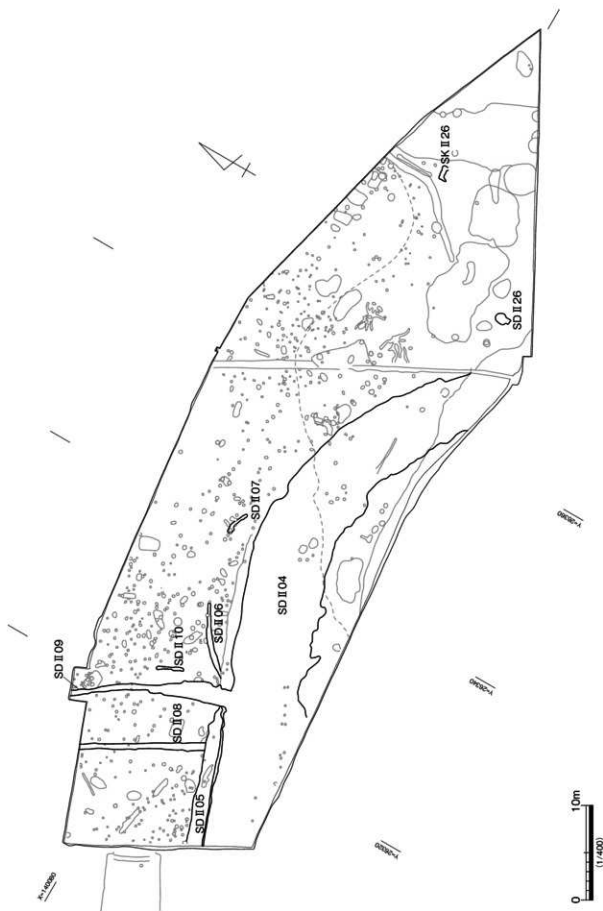
以上から、SR VI・VII 01 が河川として機能していた時期は不明であるものの、埋没の最終段階である弥生時代後期（第 3 層）において土地利用がなされ、古代にかけて平坦化したと考えられる。



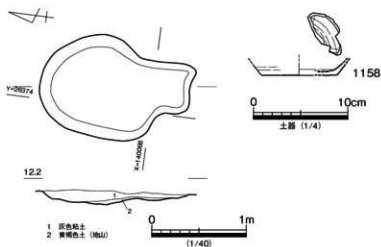
第178図 SRⅥ・Ⅶ01 上層包含層（1層）出土遺物実測図

4 古代

平池南遺跡において、古墳時代後期および古代の遺物は散見するものの、当該期の遺構（第179図）はほとんど把握できない。以下に報告する遺構は、包含遺物に古代のものが含まれるものである。



第179図 II区古代～近世以降遺構 平面図



第180図 SK II 25 平・断面図、出土遺物実測図

II 区 土坑 SK II 26

II区（平成6年度調査区）で検出した土坑である。平面形は長軸1.6m、短軸1.1mの不整形、断面形はきわめて浅い皿状を呈し、深さ0.1mを測る。7点ほどの土器細片が出土しており、第180図1158はそのうちの1点で、須恵器の杯の小片である。遺構として把握できるかどうか明確でなく、土器小片のみの出土であるが、古代の遺構として報告する。

5 中世

II区（第179図）

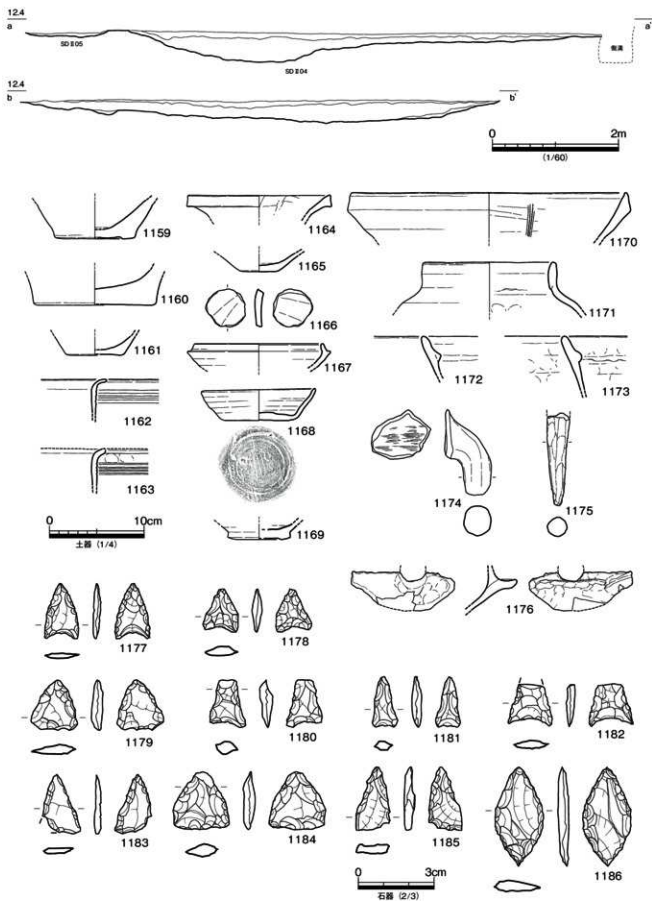
溝状遺構

SD II 04、05

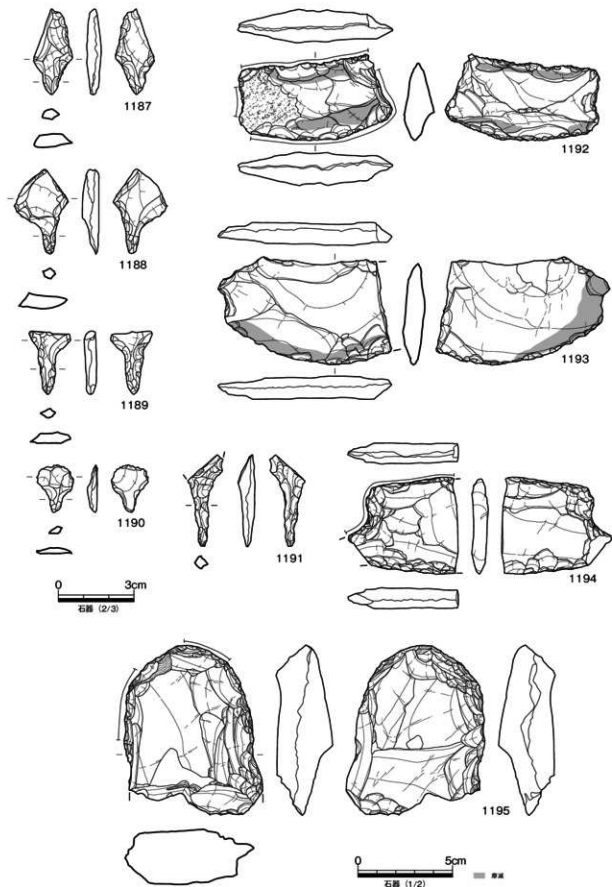
II区で検出した溝状遺構である。北西方向から西方向に湾曲しながら流れる。溝幅は7～9mと広く、深さは最深で43cmを測る。断面形はきわめて浅い皿状である。本遺構は、幅広で浅いという特徴をもつが、前代の遺構の埋め残しの凹地とは無関係で、人為的に掘削した溝状遺構と考えられる。北側に接するSD II 05はSD II 04から分岐するもので、幅1.5m、深さ5cmの規模である。

第181～183図1159～1200は、1163がSD II 05から出土したほかはSD II 04出土の遺物実測図である。周辺に弥生時代前期や後期の遺構がひろがることから、当該期の破片が多数含まれる。1167は摩滅が著しい須恵器杯身の小片である。1168は焼きの甘い須恵器杯。重ね焼きの痕跡が見られる。1169は白磁碗。削り出し高台で外面は露胎である。1170は土師器すり鉢、1172～1175は土師器足釜の破片である。1177～1187は打製石鏃、1185は刃部の整形が不十分であり未成品と考えられる。1188～1191は石鏃、1192～1194は打製石庖丁である。1192は細部調整の丁寧さの度合いから刃部を決めたが、背面も刃として利用された可能性がある。1195、1196は打製石斧、1197は楔形石器、1198はサヌカイトの敲石である。側縁のほぼ全周に敲打痕が巡る。1199は小片のため器種の特定ができない。1200は楔形石器の可能性があるが、根拠不明確なため石核としておく。

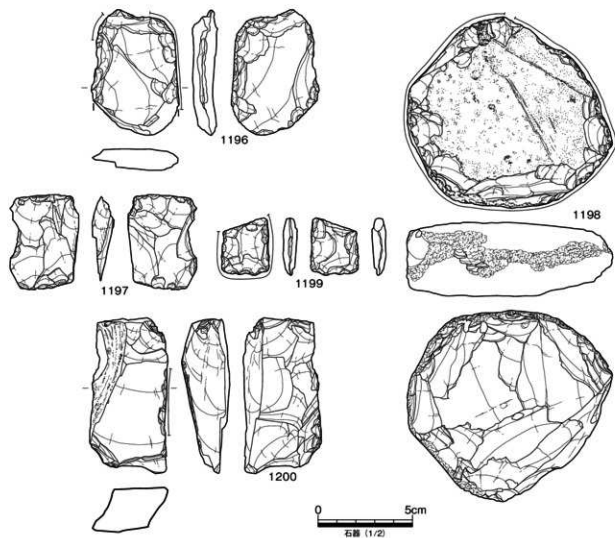
以上が、SD II 04、05出土の遺物である。いずれも小片が散在する状態で出土しており、明確な時期決定ができる出土状況ではないことから、時期幅をもって中世の溝状遺構と考える。なお、SD II 04、05に近接するSD II 06（幅0.5m、深さ5cm）、SD II 07（幅0.3m、深さ10cm）も微量の出土遺物の中に中世の土師質土器の供膳具と思われる破片が含まれることから、当該期の遺構と判断する。



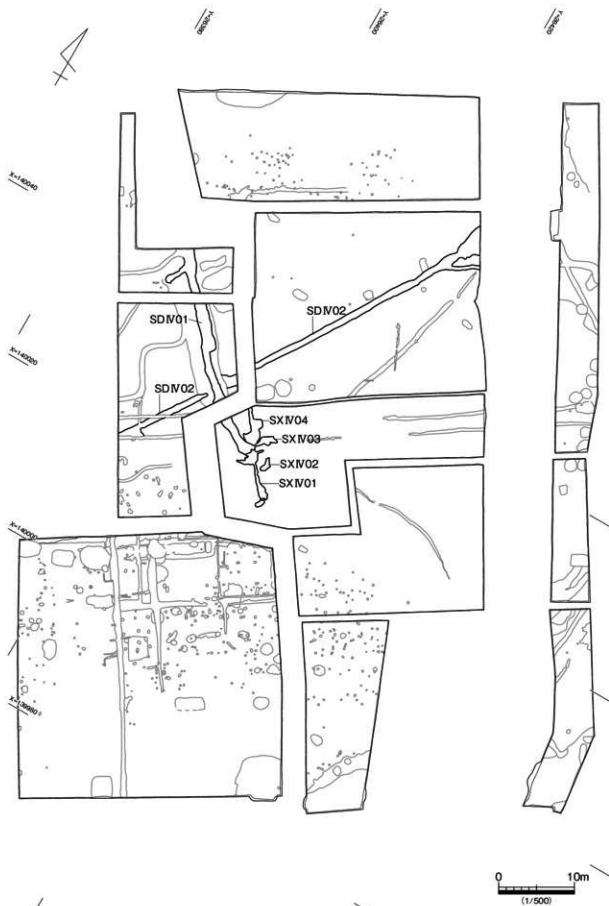
第181図 SD II 04、II 05 断面図、出土遺物実測図(1)



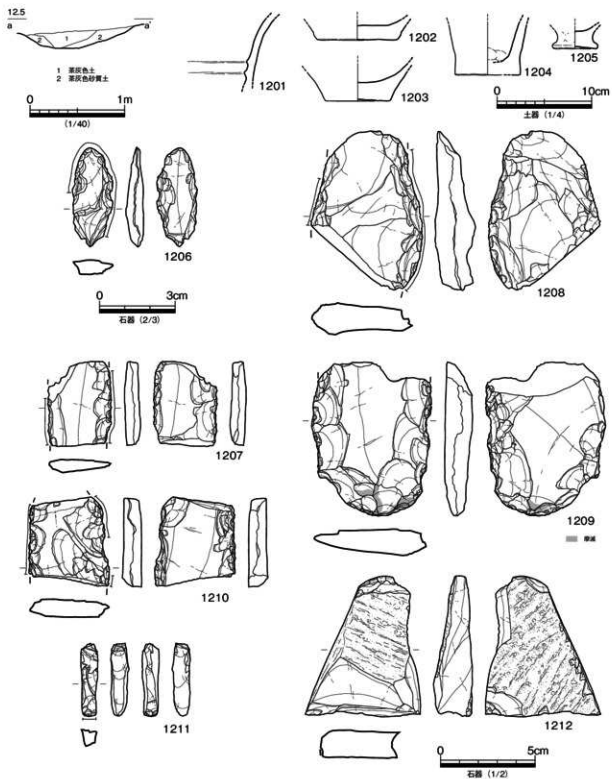
第182図 SD II 04、II 05 出土遺物実測図(2)



第183図 SD II 04、II 05 出土遺物実測図(3)



第184図 N区中世遺構 平面図



第185図 SD IV 01 断面図、出土遺物実測図

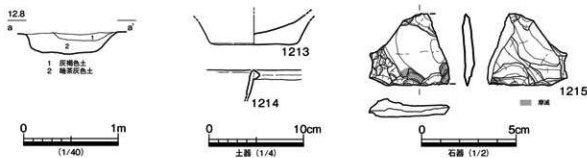
IV区 (第184図)

溝状遺構

SD IV 01

IV区で検出した溝状遺構である。座標北から西へ45°振った方向で、やや東西に振れながら直線状に流れる。南側は後述のSX IV 03に接続すると考えられる。溝幅は1.0～1.5 m、深さ25cmの規模で、断

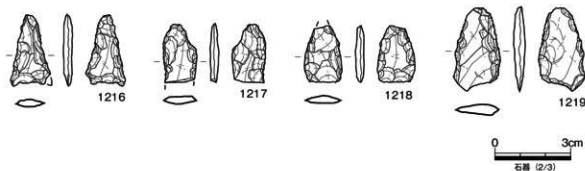
面形は浅い碗状を呈する。28リットル入りコンテナ1/4箱ほどの土器片が出土している。図化遺物は弥生時代前期を中心とするものであるが、下層に複数の須恵器細片が含まれているほか、中世の土師質土器供膳具と思われる細片が含まれ、国産陶磁器は含まれないことから中世の遺構と判断する。第185図1201は弥生時代前期の壺の頸部片である。内面に突帯を貼り付ける。1206は形状から石鏃未成品と考える。刃部は敲打によって整形している。1207～1210は打製石斧の破片、1211は剥片化した楔形石器、1212は両面ともに礫面の残る板状の素材である。



第186図 SD IV 02 断面図、出土遺物実測図

SD IV 02

IV区で検出した溝状遺構である。座標北から東へ35°振った方向で直線に流れる。幅は0.8～0.9m、深さ0.2mで、断面形は皿状を呈する。SD IV 01と交差するが、前後関係は不明である。少量の遺物細片が出土している。図化遺物は弥生時代前期の土器片であるが、このほかに複数の須恵器片のほか中世の土師質土器の供膳具と思われる細片が出土し、国産陶磁器類は含まれない。第186図1215は一個縁に摩滅が見られることから削器とした。

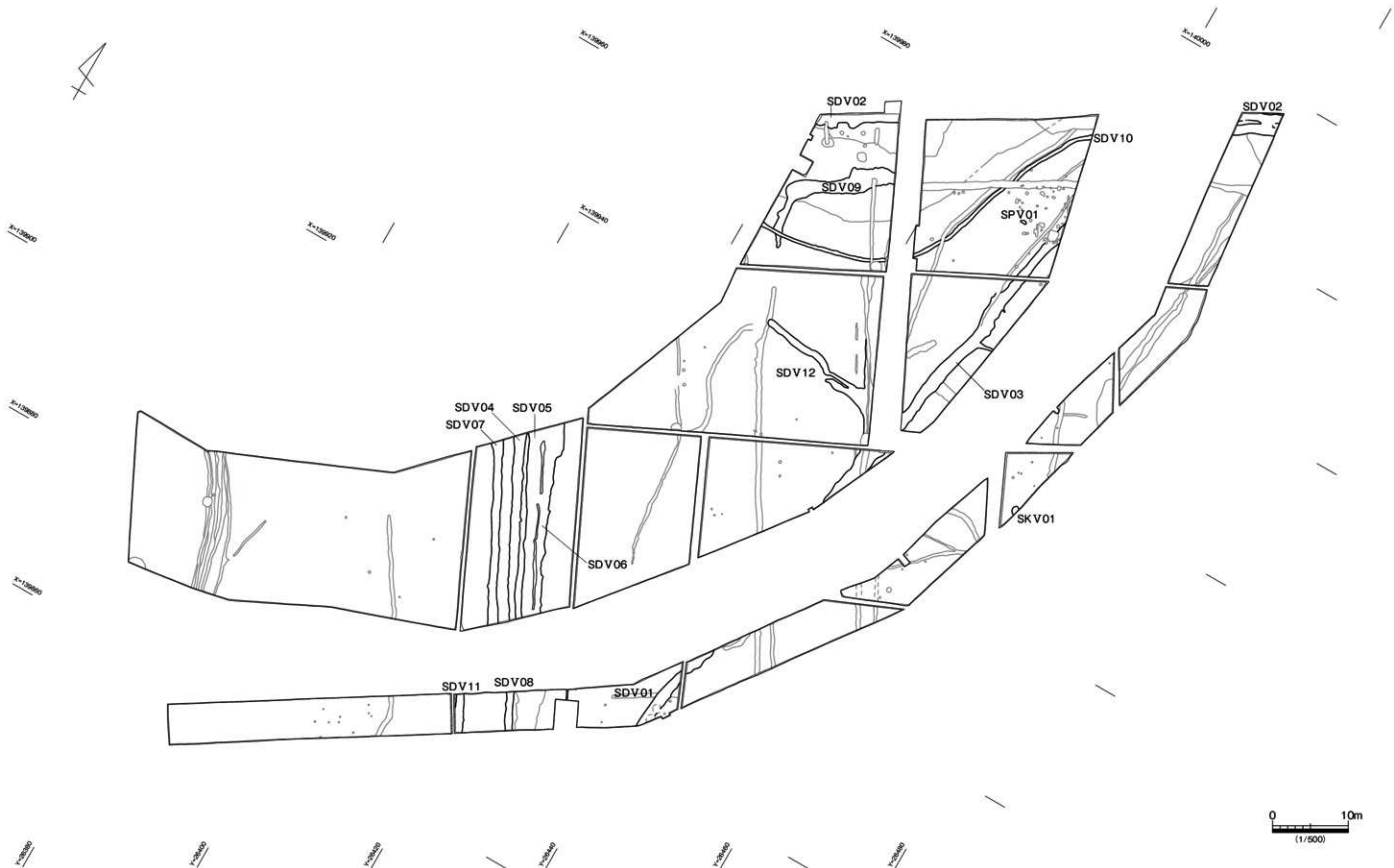


第187図 SX IV 01～IV 04 出土遺物実測図

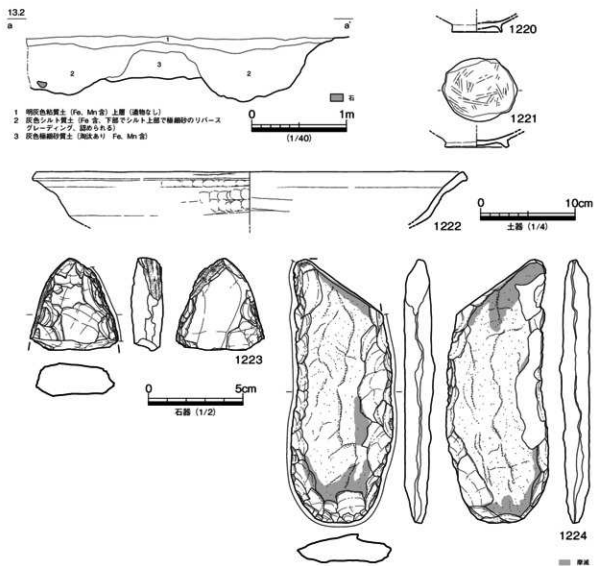
その他の遺構

SX IV 01～04

IV区で検出した溝状遺構であるが、不整形の平面形で性格不明であるためSX（不明遺構）として報告する。SX IV 01とIV 04は連続する可能性があり、SX IV 03とは切り合い関係にあるが、埋土は酷似しており、大きな時間差は考え難い。幅の変化が大ききことの意味はわからない。出土遺物は20片ほどの土器細片と図化した4点の石鏃（第187図）であるが、須恵器片のほか中世の土師質土器の供膳具と思われる細片が含まれ、国産陶磁器類を含まないことから中世の遺構と考える。



第188図 V区中近世以降の遺構 平面図



第189図 SD V 02 断面図、出土遺物実測図

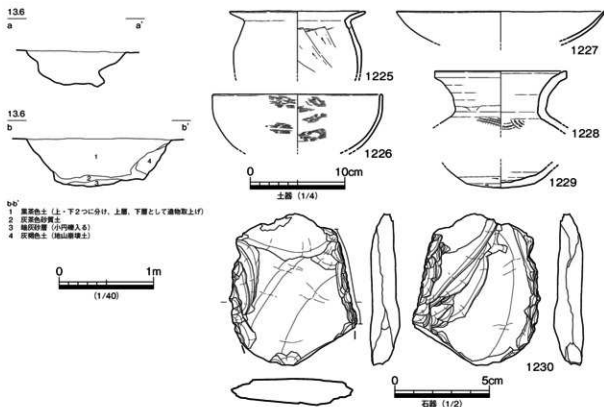
V区 (第188図)

溝状遺構

SD V 02

V区東北部で検出した溝状遺構である。スタジアム部分では③区SD59、水路部分では水路D区SD17、18として調査されているが、これらは、丸亀平野に広範にひろがる条里型地割の一町方格の東西の界界線に相当するところに位置することから同一の遺構と判断する。南岸部分のみを検出し、北岸は調査区外(里道下)となる。溝幅は1.0m以上で深さは0.6~1.0mを測る。水路部分では幅1.2~1.3mの二つの流れに分岐している。

第189図1220~1222は旧SD59、1223、1224は旧SD17、18から出土した遺物実測図である。1220は土師質土器の椀底部、1221は内面黒色の黒色土器椀、1222は土師質土器の焙烙である。1223は形状から打製石斧の基部と考える。1224は安山岩製(風化する)の打製石斧である。このほか、少量の遺物片が出土しているが、中世に属する小皿や椀と考えられる小片が複数含まれており、近世に下ると考えられる遺物は1222以外ない。このことから小片のみで時期の特定は難しいが、SD V 02は中世の溝



第190図 SD V 03 断面図、出土遺物実測図

状遺構と考えられる。

SD V 03

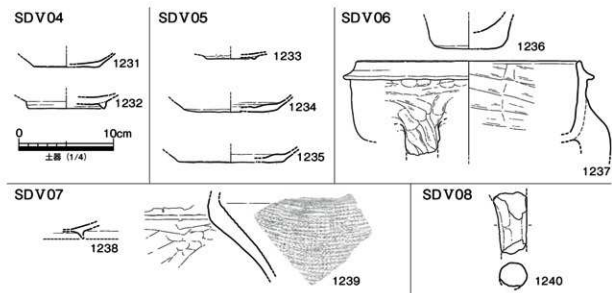
V区で検出した溝状遺構である。座標北より10°東に振る方向に直線状に流れる。検出長は47m、溝幅は1.0～1.7m、深さ0.5m、断面形は深い皿状を呈する。28リットル入コンテナ1/2箱程度の遺物片が出土している。図化した弥生時代後期土器や須恵器のほかの中世の供膳具と考えられる破片も少量含まれており、中世の遺構と考える（第190図）。

SD V 04～08

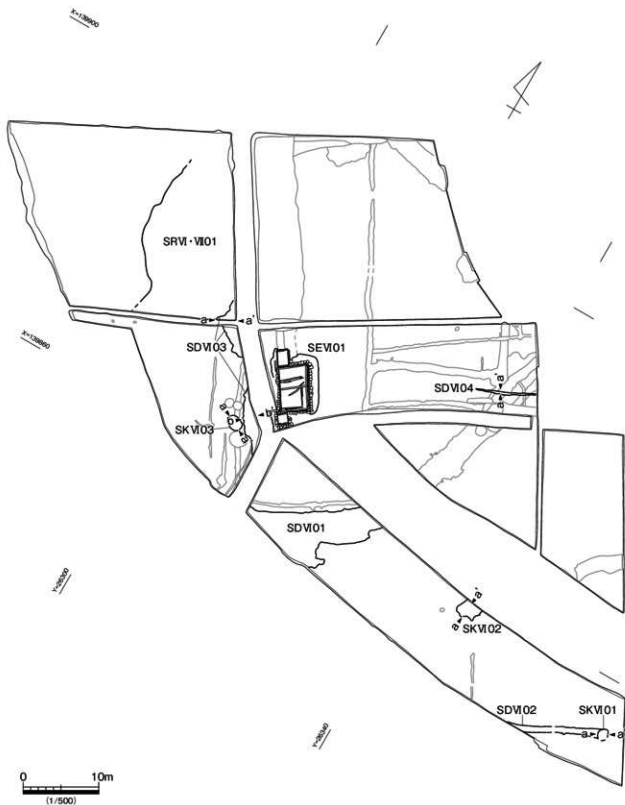
V区スタジアム部分で検出した溝状遺構（第191図）である。条里型地割の坪界線に近似する位置に、条里方向に合致して流れる溝群である。SD V 05とV 06は一条の溝が、溝底中央部の盛り上がりにより2流に分けられるものである。SD V 04は溝幅0.9～1.5m、深さ0.2m、SD V 05, 06は溝幅2.2～3.5mのなかで1.5, 0.9m幅の溝が平行に流れる。SD V 07は溝幅1.0m、深さ0.45mの規模である。断面形はいずれも碗形で、3者に切り合い関係は見られない。

SD V 08はV区水路部分で検出した溝状遺構である。SD V 04の南延長部に相当すると考えられるが、検出地点付近は後世のレンコン畑として深く耕されており、確定することができない。

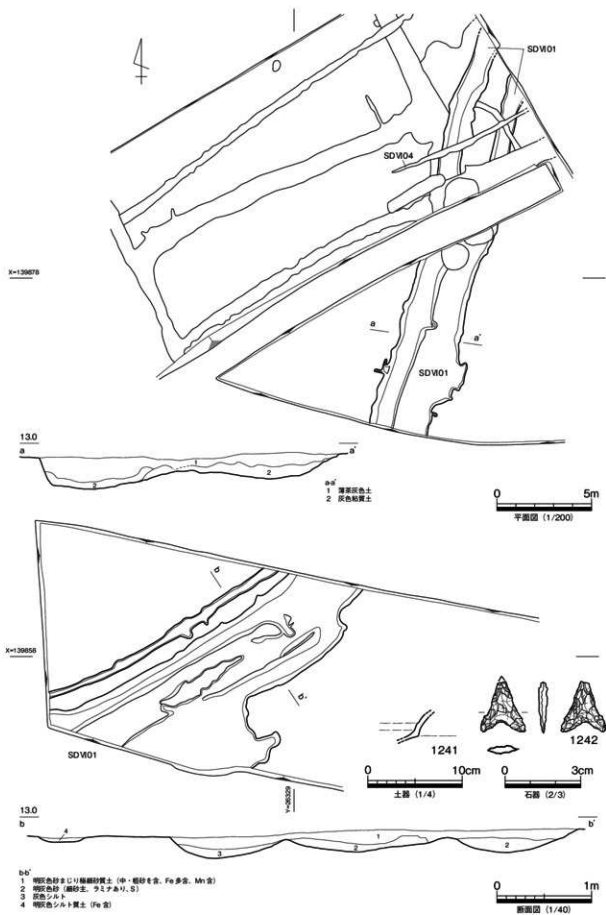
出土遺物はいずれも少量であるが、近世に下る遺物は含まれず、中世に属すると思われる小片が多い。第192図1231は土師質土器杯、1232は土師質土器碗、1233は瓦器碗、1234は須恵器杯、1235は土師器皿とした。1238は黒色土器碗である。いずれも摩滅が著しい。このほか土師質土器足釜片も出土しており、中世の遺構と判断できる。



第 192 図 SD V 04 ~ V 08 出土遺物実測図



第193図 VI区中近世以降の遺構 平面図



第 194 図 SD VI 01 平・断面図、出土遺物実測図

Ⅵ区

溝状遺構

SD Ⅵ 01

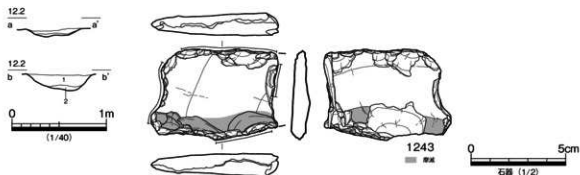
Ⅵで検出した溝状遺構である。条里型地割と合う方向で東流するものが北方向に緩く湾曲して流れる。1条の溝状遺構が分岐合流しながら流れており、見かけ上は複数の溝状遺構が複雑に入り組んでいる。溝幅はおおむね3m内外で、深さは0.3m以内、浅い椀状の断面形である。20点余りの土器小片を中心とする遺物が出土しており、図化不能であるが、中世に属する土師質土器碗や杯の小片が含まれることから中世の溝状遺構と判断する（第194図）。

SD Ⅶ 06、07

Ⅶ区で検出した溝状遺構である。

6 近世以降

Ⅳ区で屋敷跡と考えられる遺構群、遺跡全域で灌漑用水路跡、耕作のための肥溜等の施設が検出されている。屋敷跡からは、くらわんか手と称される肥前陶磁器、広東碗の影響を受けた肥前磁器、底部内面の卸目が放射状に施されることから明石産と考えられる播鉢などが含まれており、江戸時代後半の年代観が得られる。耕作にかかわる遺構群の中には、セメントの使用が見られるものもあり、新しい時代のものも含まれる。



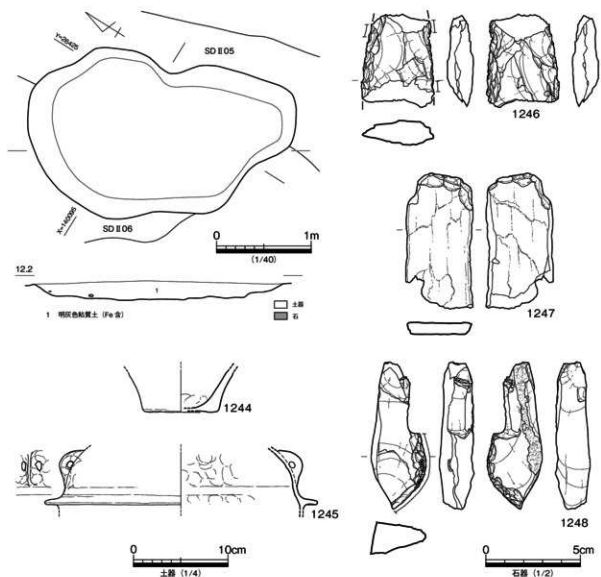
第195図 SD Ⅱ 06 断面図、出土遺物実測図

Ⅱ区

溝状遺構

SD Ⅱ 06

Ⅱ区（平成7年度調査区）で検出した溝状遺構。幅0.6m、深さ15cm、浅い椀状の断面形である。微量の土器片が出土しており、近世陶器片が含まれる。図化遺物は打製石庖丁である（第195図）。



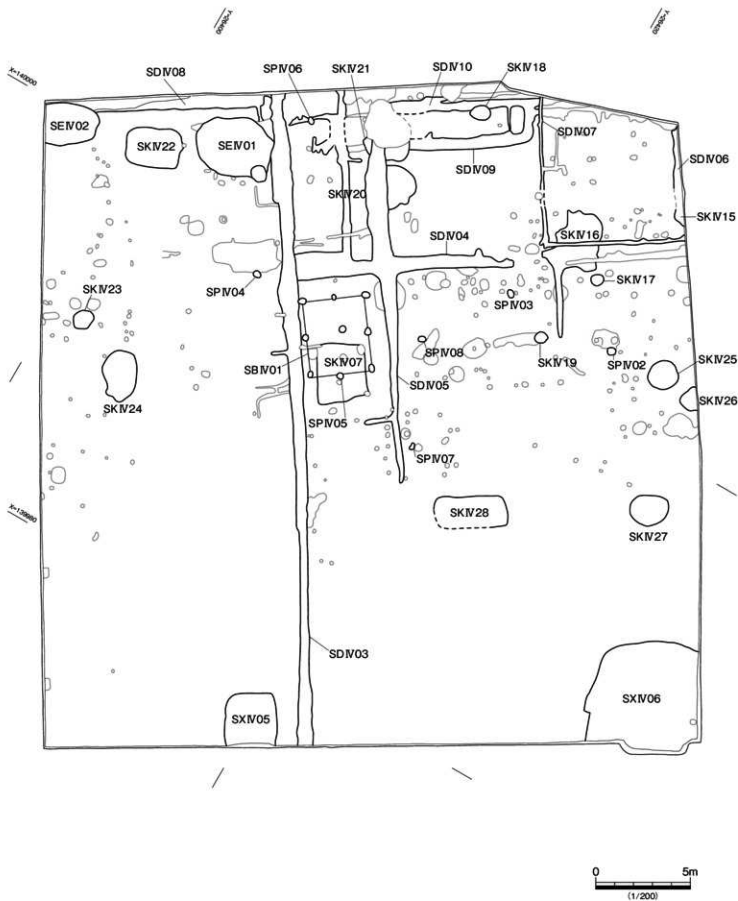
第196図 SK III 07 平・断面図、出土遺物実測図

Ⅲ区

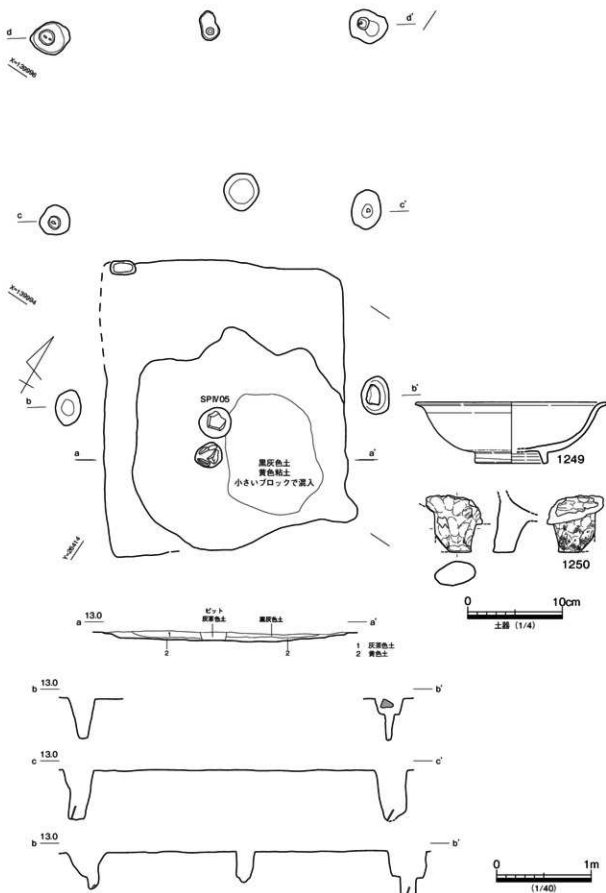
土坑

SK III 07

Ⅲ区南端で検出した土坑状の落ち込み。長径2.9、短径1.5、深さ0.2mの規模、平面形は不整、断面形は掘り込み不明瞭の皿状である。少量の弥生土器片に混じり、第196図1245の土師器鍋ほか、摩滅する瓦片等が出土している。1247は磨製石斧片であるが、小片のため器種はわからない。1248は剥片化した楔形石器。側縁にも階段状の微細な剥離が見られることから、異なる方向で複数回用いられた転用品と見られる。



第197図 IV区近世以降の遺構（主要部）平面図



第198図 SB IV 01、SK IV 07 平・断面図、出土遺物実測図

IV区 (第197図)

掘立柱建物・土坑

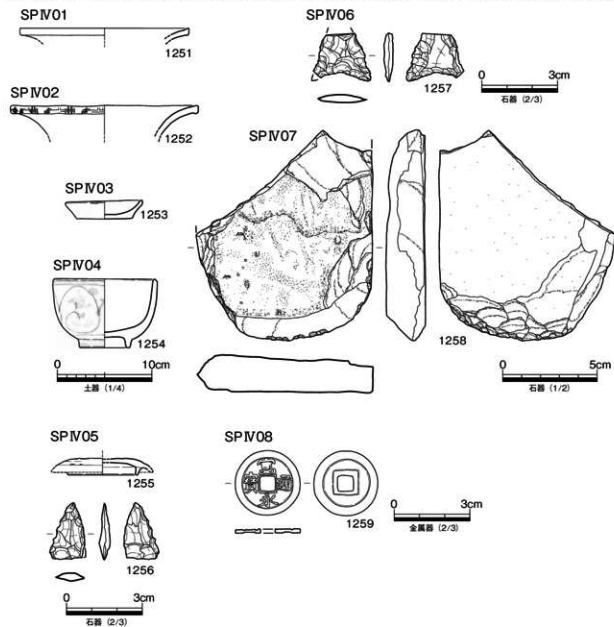
SB IV 01、SK IV 07

IV区(スタジアム部分)で検出した掘立柱建物および関連する位置関係にある土坑(第198図)である。掘立柱建物は2×2間の規模で梁行3.3、桁行3.9mを測る。建物の南半分に建物と半分重複する形でSK IV 07が存在する。3.0×2.5mの長方形で、深さ10cm、断面形は浅い皿状を呈する。また、両者はSD IV 03～IV 05に囲繞されている。

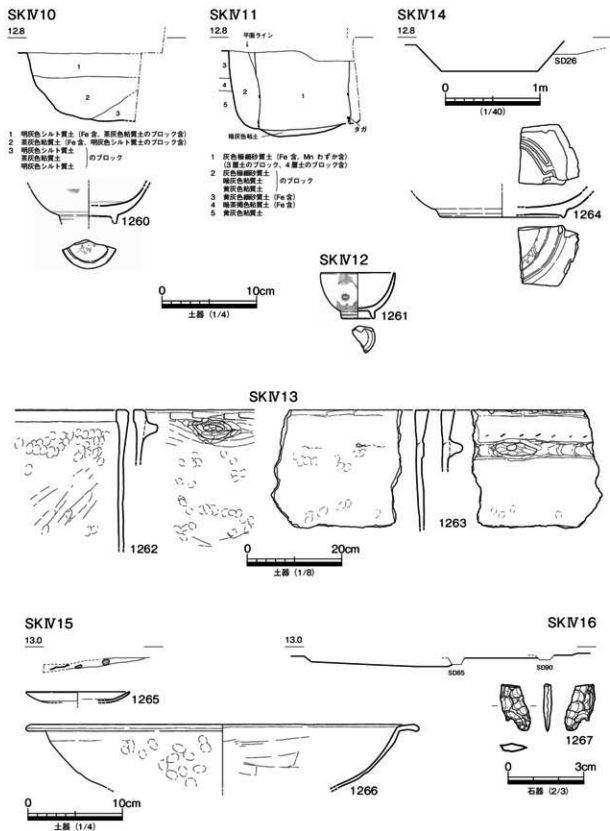
柱穴

SP IV 01～08

IV区で検出したピットである。SP IV 01、IV 02は弥生土器が出土しているが、周辺の近世遺物を出土するピットと埋土が共通することから近世のピットと考えられる。このほか土師質土器小皿、肥前系



第199図 SP IV 01～IV 08 出土物実測図



第 200 図 SK IV 10 ~ IV 16 断面図、出土遺物実測図

陶胎染付椀、打製石鏃、銅銭（寛永通宝）が出土している（第 199 図）。

土坑

SK IV 08 ~ IV 13

SK IV 08, IV 09 は、図化遺物はないが、出土遺物中に国産陶磁器片が含まれる。二つの土坑ともに直径2mほどの円形で、深さ0.8mほどの碗状の断面形を持ち、耕作に伴う肥溜等の機能をもつものと考えられる。

第200図SK IV 10 ~ IV 13は、類似する規模をもつもので、このほかの数基とともに土坑群を形成する。SK IV 10は一辺1.7mの隅丸方形、「U」字形の断面形で深さ0.7m、SK IV 11は径1.3mの不整円形、深さ0.9m、径1mの木桶が据えられていた痕跡が残る。SK IV 12, 13は、径1.6mの円形、深さ0.3mと同規模で、内部に大型の土師器甕が据えられる。耕作に伴う肥溜等の機能をもつものと考えられる。

SK IV 14

長辺2.3m以上、短辺1.5m、深さ0.3mの長方形の土坑である（第200図）。

SK IV 15

北から流れるSD IV 06の続きのように見えるが、埋土に差が見られたようで別遺構（第200図）としている。トレンチおよび調査区外に広がる関係で平面規模や形状は不明である。

SK IV 16

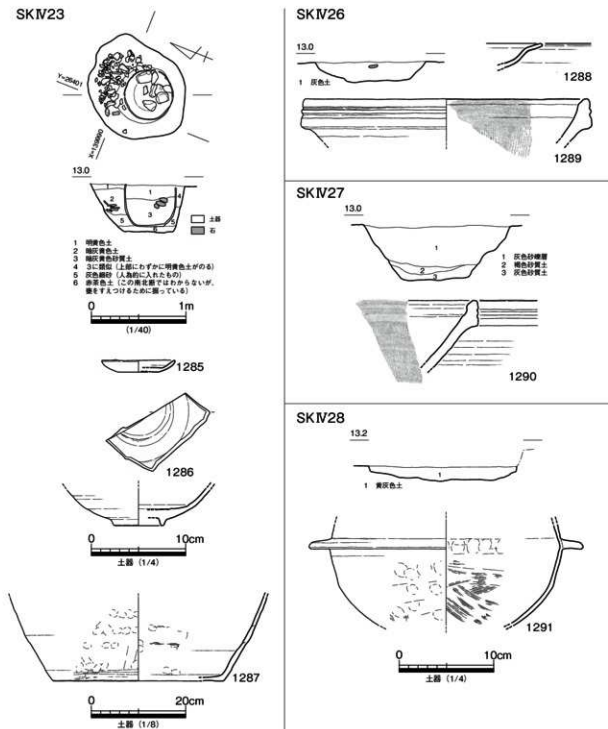
屋敷地で検出した不定形の落ち込み（第200図）である。南側に敷地を区画すると考えられる溝状遺構が接続する。深さは0.1m以下で、自然形成の凹地の可能性も考えられる。



第201図 SK IV 17 平・断面図、出土遺物実測図

SK IV 17

径65cmの円形で、深さ23cmを測る、筒形の断面形をなす土坑である。内部に棒状をなす砂岩礫が5石並べられ、土師質土器小皿の上に別の小皿を被せる状況のものが5組検出されている。第201図



第203図 SK IV 23、IV 26～IV 28 平・断面図、出土遺物実測図

SK IV 18～IV 28

第202、203図のうち、SK IV 18は長軸1.1、短軸0.8m、深さ0.4mの土坑である。土器片および石材多数が出土しており、廃棄土坑と見られる。SK IV 19は径0.6～0.7mの円形で、深さ0.25m、楕形の断面形を呈する。陶磁器片とともに両側を打ち欠いた石錘が出土している。SK IV 20は西側をSD IV 05に壊される。径2.3mほどの円形の平面形と推定され、深さは0.3m。陶磁器片等が出土している。SK IV 21はSD IV 09を切り、攪乱に北半を壊される。径2.5mほどの円形の平面形と推定され、深さ

18cm以下の浅い落ち込みである。陶磁器片等が出土している。SK IV 22 は長辺 2.8、短辺 2.1 m の隅丸方形の平面形、深さ 45cm、深い皿形の断面形の土坑である。陶磁器片等が出土している。

SK IV 23 はやや不整な円形で径 1 m、「U」字形の断面形（深さ 0.5 m）の土坑である。内部に土師質土器甕を据えている。SK IV 24、IV 25 は図化した遺物は無いが、陶磁器片等が出土している。SK IV 26 は西側の一部のみを検出し、東側は調査区外となる。径 1.2 m ほどの円形の平面形と推定され、断面形は皿形、深さ 0.2 m を測る。陶磁器片が出土している。SK IV 27 は長軸 2.0、短軸 1.6 m の不整円形の平面形の土坑、深さ 0.6 m で断面形は逆台形である。10 点ほどの細片が出土したのみである。SK IV 28 は、長辺 3.9、短辺 1.65 m の長方形で、深さ 14cm、断面形は皿状である。

井戸

SE IV 01

径 3.1～4.0 m の不整円形の平面形で、深さ 1.9 m、断面形は「U」字状を呈する土坑（第 204 図）である。湧水層まで掘り下げていることから素掘りの井戸と考える。28 リットル入りコンテナ 3 箱分の近世雑器片が出土している。SE IV 01 の西 5 m には石組みの井戸（SE IV 02・未報告）があり、少量の近世雑器片が出土している。

その他の遺構

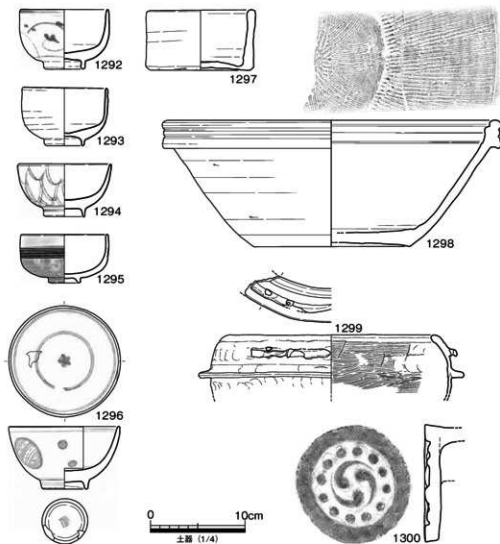
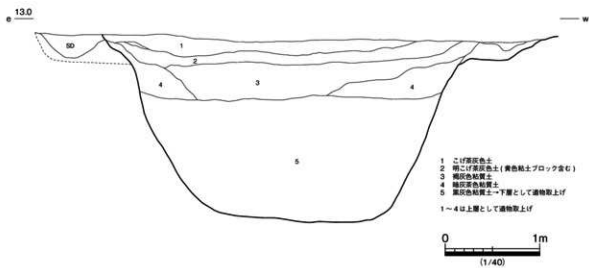
SX IV 05、06

SX IV 05 は長軸 2.7 m 以上、短軸 2.7 m の方形の落ち込み、深さ 0.2 m、断面形は皿形である。少量の近世雑器が出土している。SX IV 06 は一辺 5.7 m 以上の方形もしくは不整円形の落ち込みである。西北隅を検出し、以外は調査区外になる。50cm ほど急角度で掘り込んだ後、中心部に向けて緩やかに下る。少量の近世雑器片が出土している。SX IV 05、IV 06 ともに、屋敷地からは南に離れた位置にあり、遺構の性格はよくわからない（第 205 図）。

溝状遺構

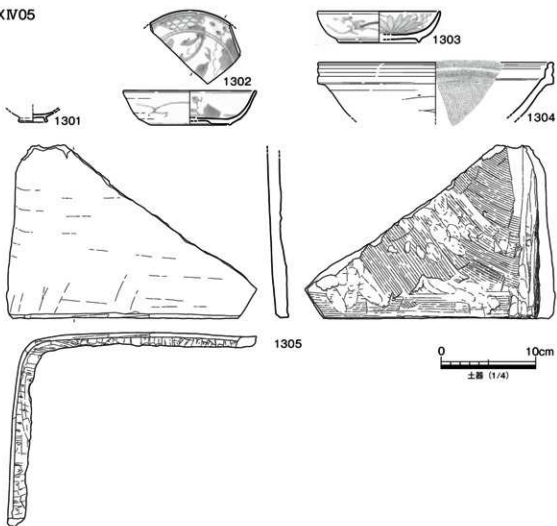
SD IV 03～IV 10

屋敷地では、敷地内を区画する小溝が複数検出されている。これらの溝状遺構には切り合い関係のあるものがありすべてが同時並存ではない（第 206 図）。

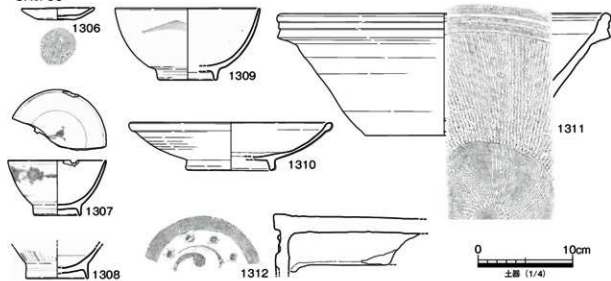


第204図 SE IV 01 出土遺物実測図

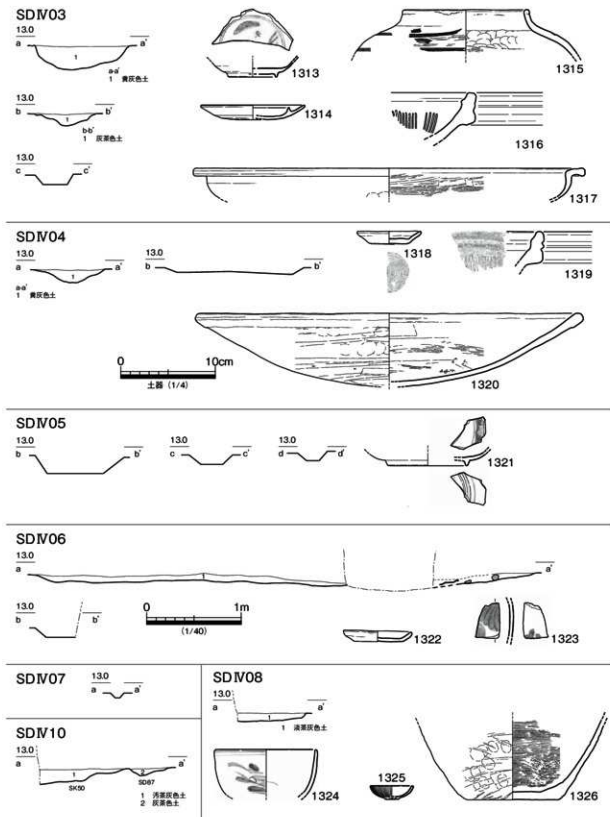
SXIV05



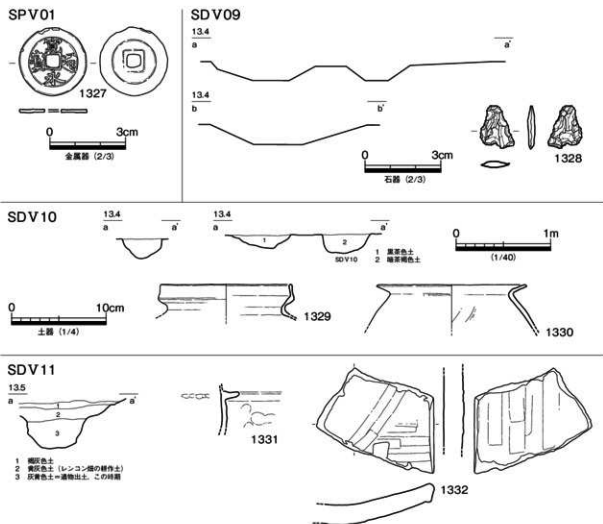
SXIV06



第 205 図 SX IV 05、IV 06 出土遺物実測図



第206図 SD IV 03 ~ IV 08 断面図、出土遺物実測図



第207図 SP V 01、SD V 09～V 11 断面図、出土遺物実測図

V区

柱穴、溝状遺構

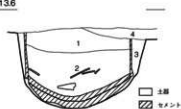
SP V 01、SD V 09～V 11

V区では、スタジアム部分の東北部でピットがやや集中する部分があるほかは、溝状遺構が数条検出されている。遺構密度は希薄である。第207図SP V 01からは銅銭（寛永通宝）が出土している。周辺のピットも類似する埋土であることから同時期のものと考えられる。

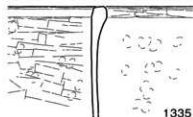
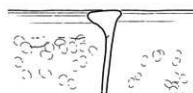
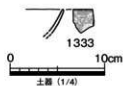
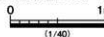
SD V 09は、溝状遺構である。糸里方向に北進する幅90、深さ7cmの小溝が、SR V 01上に至って幅140cmと幅広となり東方向に屈曲する。位置関係からすると、さらに東に延びる可能性があるが、SD V 10との切り合い関係が逆転するため、別の遺構と判断される。少量の土器細片が出土したのみであるが、磁器碗の破片が含まれる。SD V 10は、SR V 01の南岸のラインに平行する流路をもつ溝状遺構である。幅60、深さ25cmほどの規模で、黒茶色土で埋まっている。磁器片のほか弥生時代終末期ころと推定される土器片が10点強出土している。埋没過程にあったSR V 01の流路に影響されている点も踏まえて弥生時代の遺構の可能性も考えられるが、SD V 09より新しいという切り合い関係があるため、近世の遺構と見なさざるをえない。SD V 11は水路部分で検出した溝状遺構である。幅1.1、深さ0.5m、

SKVI01

136



- 1 明灰色シルト質土 (Fe わずかな)
- 2 明灰色細砂質土 (厚さ 3 cm 程の褐色粘質土のブロック、Fe 富、灰色粘質土のブロック等、上部から落ち込んだ骨子(陶片)も少量)
- 3 灰色シルト質土
- 4 明灰色シルト質土 (Fe 富) = コンクリート構造体時の復元



SKVI02

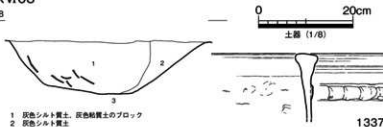
132



- 1 明灰色シルト質土 (Fe 富、Mn わずかな)

SKVI03

128

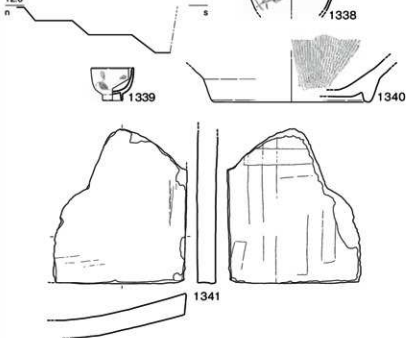


- 1 灰色シルト質土、灰色粘質土のブロック
- 2 灰色シルト質土

1337

SDVI03 (南)

126



SDVI03 (北)

126



- 1 灰色シルト質土 (Fe 多量、Mn 多) = 人工的埋設
 - 2 暗灰色細砂質シルト質土 (細砂が土中に混入) = 自然埋設
 - 3 灰色粘質土 (Fe 富、地山)
- ※断面取得位置は、平版 (土取り) 図にあり、航測時には存在していない

1344

第208図 SK VI 01 ~ VI 03, SD VI 03 断面図、出土遺物実測図

断面形は「U」字形を呈する。少量の土器片が出土しており、瓦片や土釜片が含まれる。

VI区

土坑

SK VI 01 ~ VI 03

第208図SK VI 01は、径1.4 mほどの不整形の平面形で、深さ0.85 mを測る土坑である。底部にセメントを用いて底をつくり、上に井戸側をのせている。肥溜等の機能が考えられる。SK VI 02は一辺2.6、一辺2.2 m以上、深さ0.2 mの不定形の浅い落ち込みである。1点の花崗岩のほか、砂岩壘円礫を投棄したと考えられる落ち込みである。20点弱の土器細片が検出され、磁器椀片が含まれる。SK VI 03は長径2.1、短径1.6 mの楕円形の平面形で、深さ0.5 mの土坑である。土師質土器甕を据えていた。肥溜等の機能をもつものと考えられる。また、周辺に類似する規模の3基の土坑が存在するが、同じ性格をもつものと見られる。

溝状遺構

SD VI 02、VI 03

SD VI 02は、N - 62° - E方向に直線に流れる溝状遺構で、SK IV 02より古い。幅0.8、深さ0.1 mで浅い椀状の断面形である。少量の土器細片が出土したのみで年代不明であるが、明灰色シルト質土の埋土の様相から近世の遺構と考える。

第208図SD VI 03は、N - 35° - W方向に流れる溝状遺構である。幅2.7 m以上、検出部分での深さ0.7 mを測る。近世雑器片が出土している。

VII区（第209図）

土坑

SK VII 04、VII 05

SK VII 04、SK VII 05は並列する。SK VII 04は径1.35 mの円形で東側に張り出す平面形で、深さ0.47 m、断面形は「U」字形、SK VII 05は径1.1、深さ0.75 mの内面にセメントを貼り付けて構築した土坑である。肥溜等の機能が考えられる（第210図）。

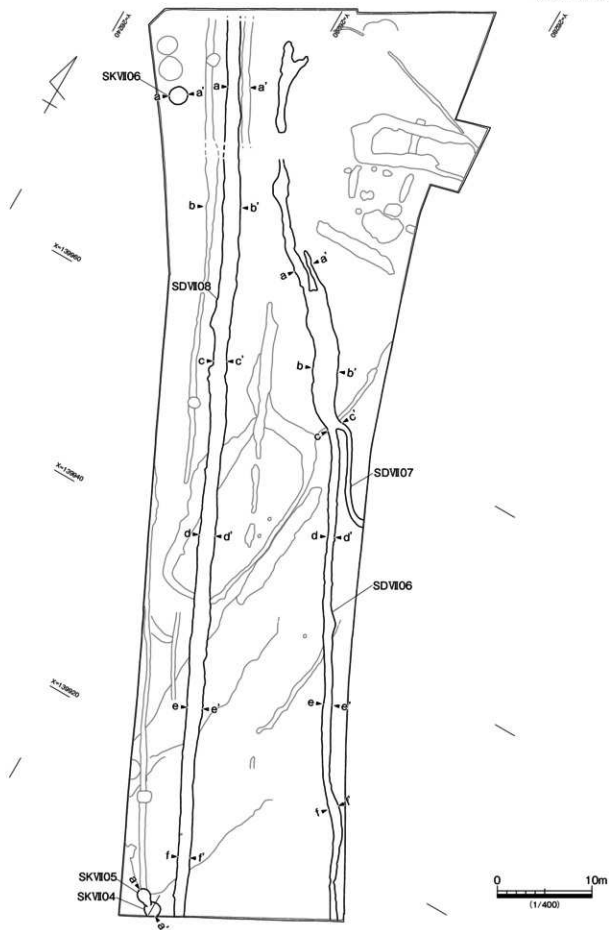
SK VII 06

径1.9、深さ0.75 m、断面「U」字形の土坑である。陶器片が出土している。周辺に所在する3基の土坑とともに肥溜等の機能をもつと考えられる。

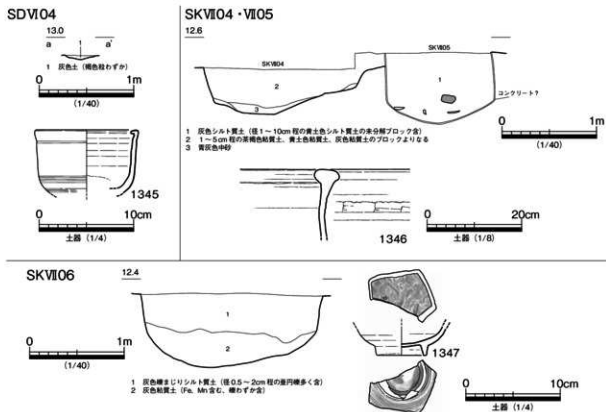
溝状遺構

SD VII 06 ~ VII 08

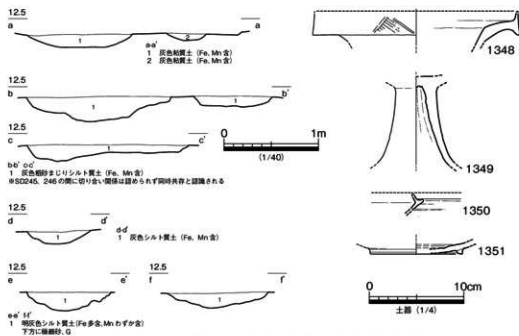
SD VII 06は、幅0.8 m、深さ0.15 m、浅い椀状の断面形の溝状遺構である。東側を流れるSD VII 07（幅0.4 ~ 0.9、深さ0.1 m）と平行して流れるが、2か所で連結している。SD VII 06の検出長は90 mに及ぶが、微量の土器細片が検出されたに過ぎない。図化遺物は弥生土器、古墳時代の須恵器杯、古代の高台を付



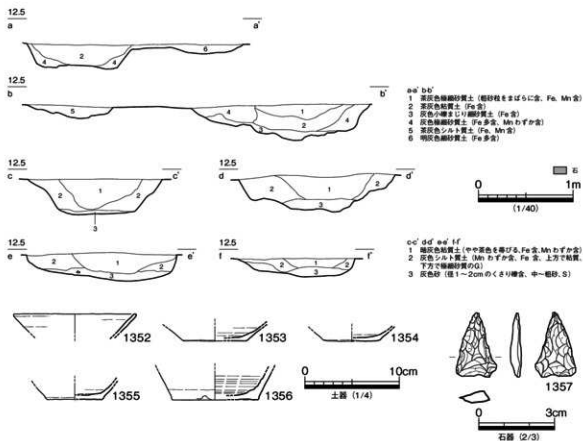
第209図 VII区 近世以降の遺構 平面図



第210図 SD VI 04、SK VII 04～VII 06 断面図、出土遺物実測図



第211図 SD VII 06、VII 07 断面図、出土遺物実測図



第212図 SD VII 08 断面図、出土遺物実測図

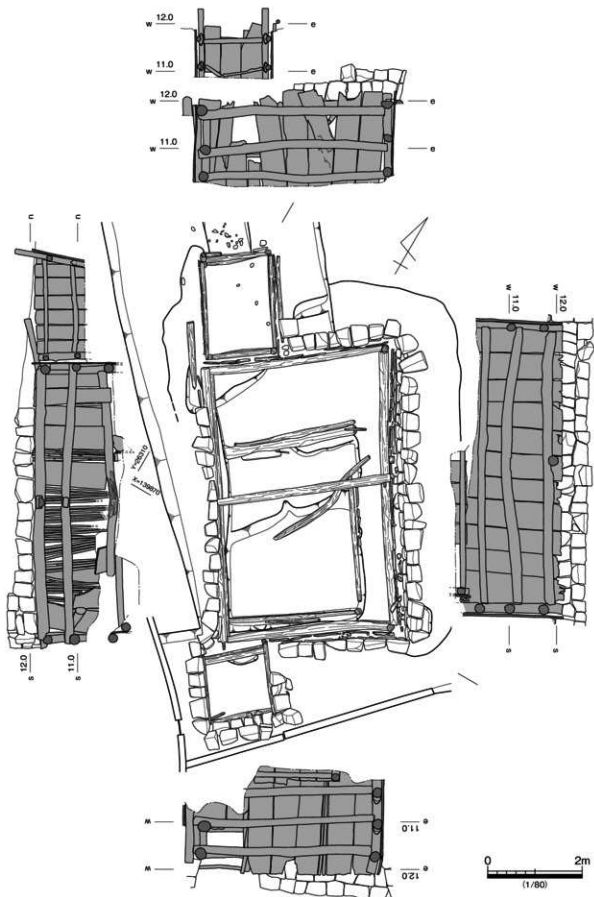
す須恵器杯であるが、時期決定の根拠とするには薄弱である。埋土が近世と考えられるSD VII 08と類似することから、近世の溝と考えておく(第211図)。

SD VII 08は、幅1.8mほど、深さ0.3~0.4mで皿状の断面形の溝状遺構である。条里地割と合致する方向で流れる。検出長94mに及ぶが少量の土器細片が出土したのみである。中世遺物が多いものの、近世陶器片が若干量含まれている(第212図)。

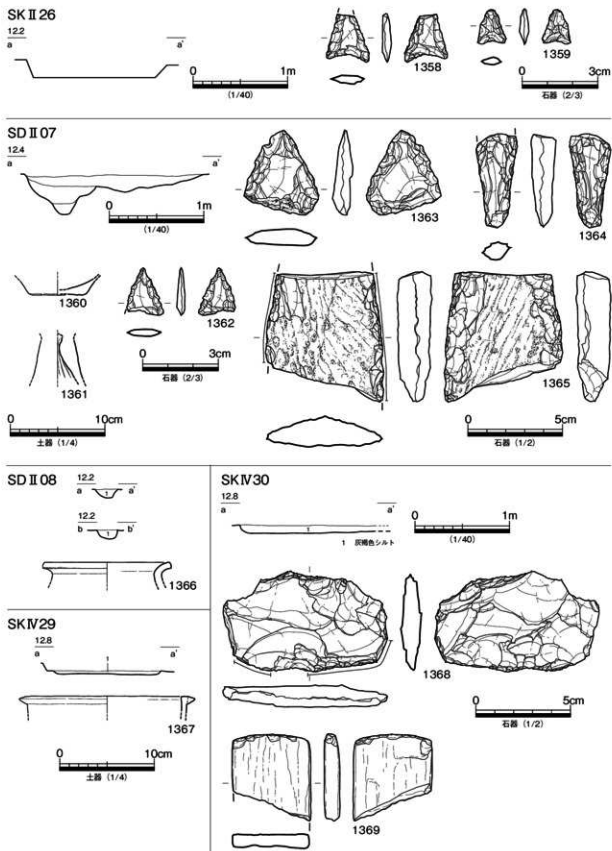
井戸

SE VI 01

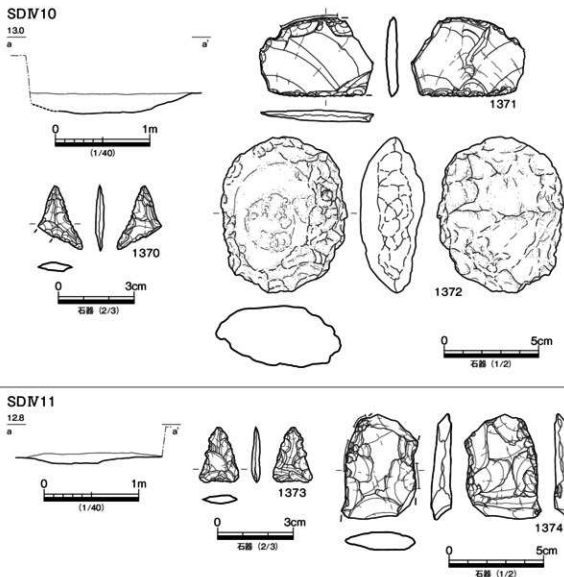
VI区スタジアム部分で検出した湧水施設(第213図)である。南北方向の長軸6.3m、東西方向の短軸4.0m、深さ3.5m以上の直方体を主とし、南辺、北辺に各々南北1.5、東西1.5、深さ0.9m(石天端より)と南北2.2、東西1.5、深さ1.36m(石天端より)の小枠を付設し、北小枠から天幅2.6m、深さ0.9mの溝を延ばしている。主施設は径20cmほどの丸太によって直方体の枠をつくり、その内側に矢板を並べ、一部では杭を打ち込んでいる。その内側にも径20cmほどの丸太を直方体に組み上げている。二重の丸太によって矢板や杭を挟み込んで、矢板や杭を固定するとともに全体で周囲の土圧に耐える構造としている。なお、丸太の連結は柄と柄穴によるが、一部縄によって固定している。最上部の丸太の上には花崗岩の切石を2段積み上げている。石は現地で加工したようで、石と石との間隙がほとんどないほど精巧に積み上げている。周囲への水による浸食や浸透を防ぐとともに、下部の構造物を押さえる役割を持



第213図 SE VI 01 平・断面図



第 214 図 年代不明の遺構 平・断面図、出土遺物実測図(1)

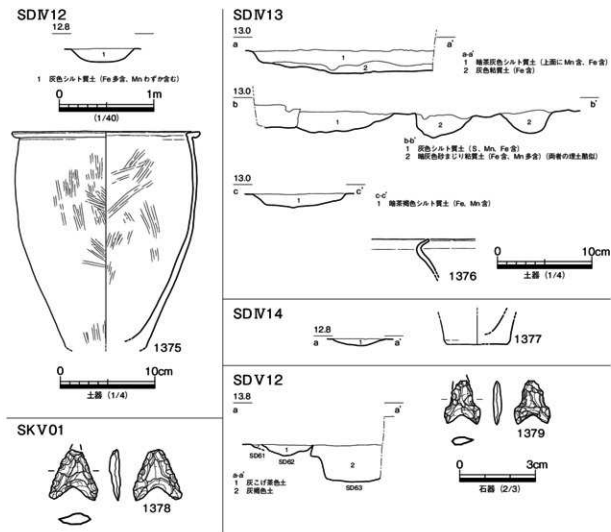


第 215 図 年代不明の遺構 平・断面図、出土遺物実測図(2)

つと考えられる。

本遺構は、押えの丸太の一部がはずれている等、崩落の危険があったため深度が2mを越えて湧水が見られ始めた段階で掘削を中止し、壺掘り等による底部の確認等の調査に切り替えた。この結果、切石の天端から3.6m下が底で、砂礫層を掘り込んでいることが確認された。

丸亀平野において地下水を得るための施設として、野井戸・堀・出水（すい）があげられる。出水は地下水を湧出させ、水路によって自然に流下させて灌漑に供する施設で、堀は一般に方形で一辺が一間ないし二間位の大きさ、井戸は一般に円形で径0.9m内外のものと定義されている（位野木寿一 1935年「丸亀平野に於ける灌漑の地理学的研究」『大塚地理学会論文集 第五輯』古今書院）。このことからSEVI01は出水とした。なお、年代を検討できる出土遺物は皆無であり、聞き取りで昭和30年頃までは使用されていたが、地下水の湧出不良のために埋め戻したという情報を得ている。構築年代は土地台帳に明治時代後半に土地の名義が複数名に変更されており、何らかの関係があるかもしれないが、地目の変更はされていないため、詳細はわからない。



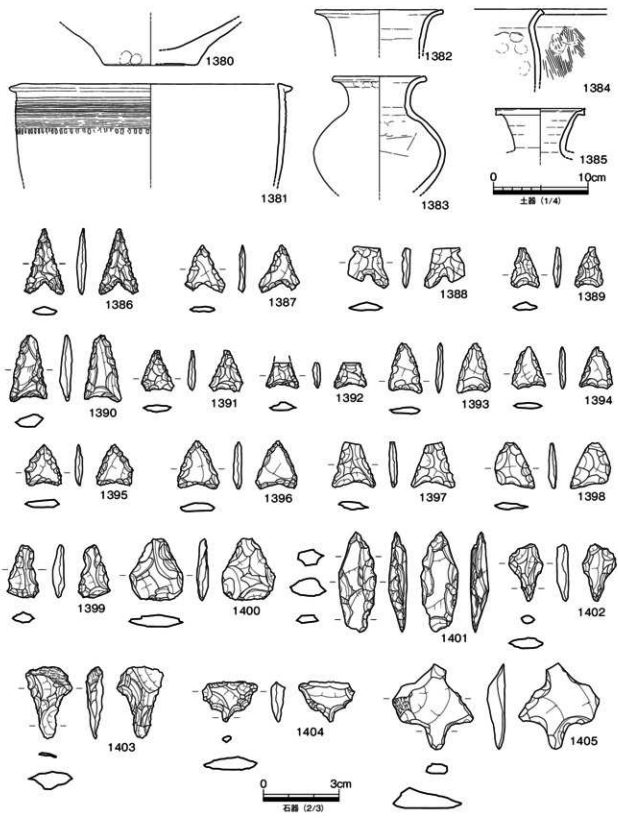
第 216 図 年代不明の遺構 平・断面図、出土遺物実測図 (3)

年代不明の遺構出土の遺物

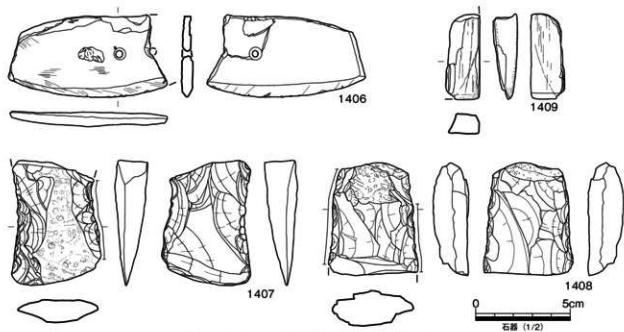
第 214 図～第 216 図は、図化可能な遺物が出土しているものの、所属年代を明らかにし得ない遺構である。

S K II 26 は、図化遺物のほかには 4 点の土器細片が出土したのみで年代を特定できない。S D II 07 は幅 0.6、深さ 0.3 m の溝状遺構であるが、少量の土器細片が出土したのみである。図化遺物は摩滅が著しく、1361 は土師器高杯である可能性もあるが、判別不能である。S D II 04 と交差するが、関係不明瞭なため時期を特定できない。1363 は礫面を残す基部が不十分な調整で終わることから未成品と考える。1365 は両面に礫面の残る剥片を利用する打製石斧である。S D II 08 は幅 0.2、深さ 0.1、検出長 2.9 m の小溝である。弥生時代後期の甕の細片 (1366) が出土しているが、出土遺物は微量であり、方向が条里方向と関連する可能性もあることから時期不明としておく。

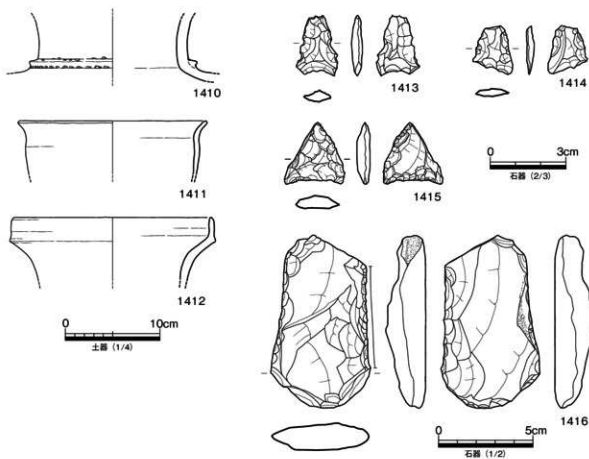
S K IV 29、IV 30 は弥生時代前期の土坑が散在して検出された IV 区スタジアム部分で検出された土坑である。弥生時代前期の可能性を考えられたが、確証が得られないため時期不明である。1368 は刃部および背部の整形がやや不十分であるが、刃部の一面にわずかに摩滅が認められることから削器と考え



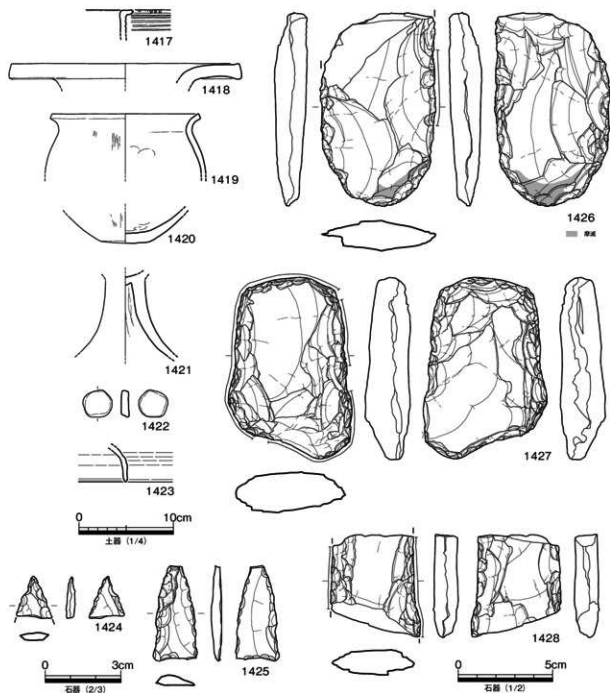
第217図 II区遺構外 出土遺物実測図(1)



第218図 II区遺構外 出土遺物実測図(2)



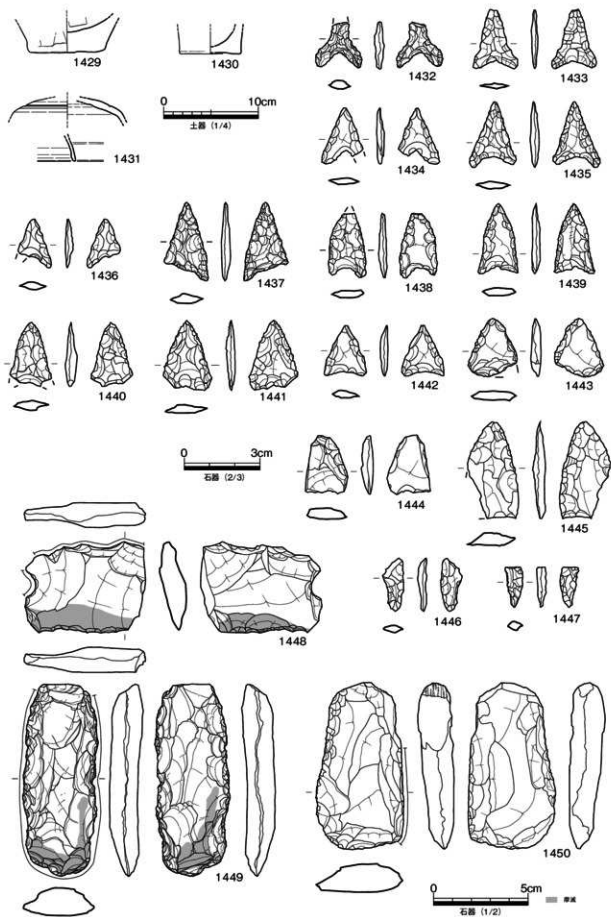
第219図 II区遺構外 出土遺物実測図(3)



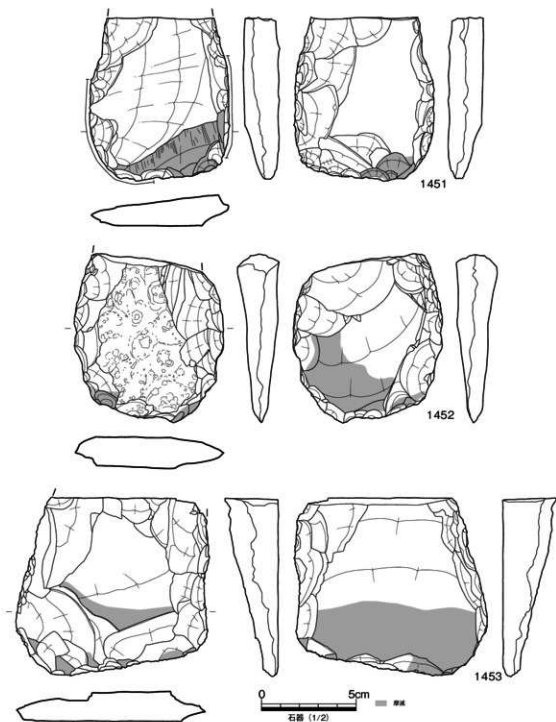
第220図 III区遺構外 出土遺物実測図

る。1369は扁平片刃石斧と思われるが小片のため不明である。

S DIV 10、IV 11はS DIV 01付近に所在する遺構であるが、位置の特定ができないものである。1372は鉱物粒のよく発達した深成岩である。敲石としたが顛例に欠け、根拠薄弱であることをお断りする。S DIV 12からは比較的大きな破片となった弥生時代前期の甕が出土している。ただし、出土状況写真から、溝の範囲を越えて、つまり、下層の包含層中のものである可能性があり、溝の年代を示す遺物としては取り扱えない。S DIV 13は伴出遺物に須恵器片が含まれており、S DIV 14は、1377の他は数片の土器細片が出土したのみで年代を決める根拠とならない。SKV 01は石鏃1点が出土したのみ、S DIV 12は石鏃の他、10点ほどの土器細片が出土したのみである。



第221図 IV～VI区遺構外 出土遺物実測図(1)

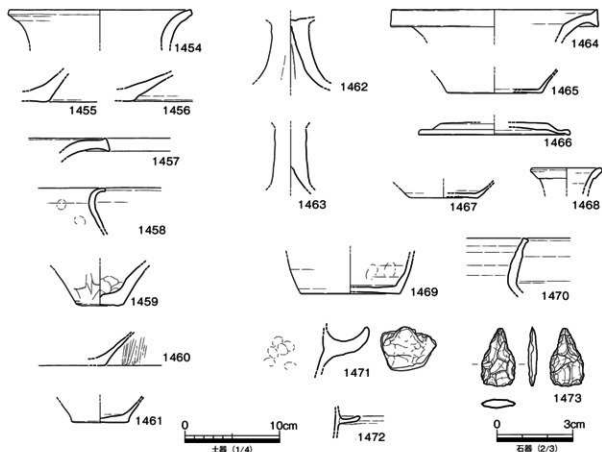


第222図 IV～VI区遺構外 出土遺物実測図(2)

遺構外出土の遺物

第217～223図は、これまでに報告した以外の包含層出土の遺物、トレンチ調査等で層位を把握できなかった遺物、排土中から採集された遺物等、遺構外の遺物の実測図である。

第217、218図1380～1409は、Ⅱ区（平成7年度調査区）出土の遺物実測図である。1381の甕は、逆L字状口縁で櫛描きの沈線、列点文を施す個体である。1385は須恵器壺である。1386～1401は石鏃。



第223図 VII区遺構外 出土遺物実測図

1401は凸基（尖底）式の石鏃である。1399～1401は風化等のため判然としないが未成品の可能性がある。1402～1405は石鏃である。1406は磨製石庖丁、一孔を穿とうとして放棄し、内側に別の一孔を開けている。1407、1408は打製石斧、1409は緑泥岩製の磨製扁平片刃石斧の刃部の破片である。

第219図1410～1416は、Ⅱ区（平成6年度調査区）出土の遺物実測図である。1410は壁切り中の出土。頸・胴部の境に上下に刺突文を施した突帯を貼り付ける弥生時代後期の壺である。1412は外湾する頸部から直立する口縁部を有する器台である。1413～1415は打製石鏃。1415は一個縁に細部調整が行われていないことから未成品と考える。

第220図1417～1428は、Ⅲ区出土の遺物実測図である。弥生時代前期から古墳時代の遺物が出土している。1426～1428は打製石斧である。1427の刃部は折損しているが、潰れの状況から折損後も使用された形跡が認められる。

第221、222図1429～1453は、Ⅳ～Ⅵ区出土の遺物実測図である。1431の須恵器杯蓋の天井部と口縁部は接合できないが同一個体である。1432～1445は打製石鏃。1443、1444は未成品と考える。1449～1453は打製石斧である。

第223図1454～1473は、Ⅶ区出土の遺物実測図である。弥生時代前期、後期、古代の遺物が出土している。

